

神通力者への道

人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

オウム出版広報編集部 編

神通力者への道

◇人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

オウム出版広報編集部 編

はじめに

あなたは、人間を超えたいと思ったことがないだろうか？「自分の本当の力はこんなもんじゃないんだ！」と、心の中で叫んだことはないだろうか？

そんなあなたのためにこの本は発刊された。本書は、単なる「フツウの人々」が不思議な縁で修行に巡り合い、麻原彰晃尊師の指導によってクンダリニー・ヨーガを成就し、大いなる智慧（ちえ）と神通力（じんつうりき）を身につけていく過程を描いたノンフェクションである。

ところで、クンダリニー・ヨーガの成就——などといきなり言っても、ほとんどの方は何のことかわからないであろうから、少しご説明しよう。

クンダリニーとは、人間の精神を高い次元へ押し上げる働きのある霊的エネルギーである。すべての人がこのエネルギーを持っているのだが、普通は、尾てい骨に眠った状態だ。このクンダリニーを覚醒させ、上昇させ、それによって煩悩を昇華し、平安の境地に達したのがクンダリニー・ヨーガの成就なのである。

このクンダリニー・ヨーガを成就すると、その人は人間を超えることができる。巷の超能力などとは比べものにならない神秘的な力が身につき、精神性においても普通の人間をはるかに超えるようになるのである。

オウム真理教では、このクンダリニー・ヨーガの成就を果たした者が百名余り存在するが、今回は、その中で四名の体験をご紹介することにした。一名が最近成就した者で、その他三名は数年前に成就を果たし、それからさらに修行を深めた者たちである。彼らの体験を読むことによって、あなたの前に、新しい光輝く世界が立ち現われるだろう。

あなたが、彼らの後に続き、大いなる智慧を持った「神通力者」になられんこ

とを心より祈って――。

一九九二年二月五日

オウム出版広報編集部

神通力者への道 ◆ 麻原尊師の愛弟子、四名の体験

❖人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

人の心を読む——修行で得た他心通の世界

※オウム真理教では、成就者はホーリー・ネーム（祝福された修行者名）で呼ばれる。「師」というのは、クンダリニー・ヨーガの成就者に与えられる称号。

◉ズバリ、お見通し

霊峰・富士が青空にくっきりと美しい、九〇年初秋のある日。麓の国道を、一台の車が滑走していた。

運転席には、巻毛の女性が見える。助手席には、少し日本人離れした雰囲気の男性が座っていた。

女性の名は、タントラジェーンティー師※（本名　小林由紀　二十九歳）。男性の名は、ウルヴェーラ・カッサパ師（本名　鎌田紳一郎　三十二歳）。共に、オウム真理教ＡＭＩ（アストラル・ミュージック・インスティテュート）のメンバーで、ウルヴェーラ・カッサパ師はそのチーフだ。

タントラジェーンティー師は、車を運転しながら、マントラ（真言）を心の中で唱えていた。

「マントラを唱えているだろう。」

突然、ウルヴェーラ・カッサパ師がそう聞いた。

えっ？　どうしてわかるんだろう。

「わかりますか。」

「うん。」

……心を読まれてしまったんだ。うーん、ちょっと嫌だけど、まあいいや。最近は、よくあるから。

タントラジェーンティー師はそう思って、マントラを心の中で唱え続けた。するど、エネルギーがだんだんと上昇してきて、アナハタ・チャクラ（胸にある霊的センター）で止まった。アナハタ・チャクラにけがれがあるので、そこから上にエネルギーが通らないのだ。

「アナハタで詰まっているなあ。」

また！　タントラジェーンティー師はにが笑いした。気にせず、マントラを唱え続けると、徐々にエネルギーがアナハタから上に移動して、ヴィシュッダ・チャクラで止まった。

「うん？　詰まりが上に移動しているなあ。」
「……そのとおりです。」
もうすべてわかってしまう。タントラジェンーティー師は、観念した。

車が、オウム真理教の富士山総本部道場に着き、タントラジェーンティー師とウルヴェーラ・カッサパ師は、サティアン・ビルの一室に戻った。

いつものとおり、作曲などのワーク（奉仕修行）を続けていると、一人のサマナが部屋に入ってきた。
「うん？　だれか入ってきただろう。」
「え？」
ウルヴェーラ・カッサパ師にそう言われて振り向くと、そこに一人のサマナが立っていた。
「聞こえたんですか？」

ドアが開いていたのか、タントラジェーンティー師には、彼女が入ってくる音は全く聞こえなかった。ウルヴェーラ・カッサパ師には、聞こえたのだろうか？
「いいや。」
ウルヴェーラ・カッサパ師は答えた。
「〝他心通(たしんつう)〟ですか。」
「うん。波動を感じたんだよ。」
「すごいですね。最近は。」
タントラジェーンティー師は、感心してそう答えた。

◉偉大なる六つの神通力

「――あのときのウルヴェーラ・カッサパ師は怖かったですね、本当に。何でも見抜かれてしまうんですから。」
と、タントラジェーンティー師は、当時を思い起こしてそう語る。

確かに、このときのウルヴェーラ・カッサパ師に対して「怖い」と感じていた人間は彼女だけではなかっただろう。一部のサマナ（出家修行者）の間では「ウルヴェーラ・カッサパ師のそばに行くと、何でも見抜かれてしまう」という評判が立っていた。心臓がドキッとするような体験をしたのは、彼女の他にもたくさんいたのである。

この人の心をズバリと見抜く能力――これを他心通と呼ぶ。

他心通――。皆さんは、こんな言葉はおそらくご存じないだろう。実は、これは仏教で使う言葉なのである。仏教では、修行をすると六神通（ろくじんつう）と呼ばれる神秘的な力がつくとされているのだ。

六神通とは、

・神足通（じんそくつう）（空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりす

人の心を読む——修行で得た他心通の世界



ることのできる能力）
・天耳通（てんにつう）（神々の声を聞いたり、普通の人間なら聞くことのできないほど遠くの音を聞いたりする能力）
・他心通（他人の心を知る能力）
・宿命通（しゅくみょうつう）（前生を知る能力）
・天眼通（てんげんつう）（一般に遠隔透視能力といわれているが、これは北伝系仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智（ししょうち）のこと。死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力）
・漏尽通（ろじんつう）（完全なる絶対なる神の叡智（えいち））

これら六つのことである。もうおわかりのとおり、この六神通の一つが他心通なのである。

ここでご紹介するウルヴェーラ・カッサパ師は、オウム真理教でも、クンダリ

ニー・ヨーガの成就者の中では他心通が得意な師として知られている。
「いいなあ。そういう人は。素質があったんだろうな、きっと。」
精神世界に足を突っ込み、いろいろ試してもてんで結果が出なかった人は、そういってため息をつくかもしれない。しかし、落胆するのは、まだ早い。
「僕は、オウム真理教に入る前、本に載ってるいわゆる『超能力者適正テスト』みたいなものをいくつかやったことがあったんですが、まるでダメでした。『全く適正なし』と出るんです。
中国拳法に興味を持って、大極拳をやったこともあったんですが、小周天ができなくて結局挫折しましたし……。」
とウルヴェーラ・カッサパ師は語るのである。
では、いつから彼はこんな神通力を身につけるようになったのだろうか?
「尊師のご指導で、オウム真理教の修行を始めて、クンダリニー・ヨーガを成就したときに、〝他心通の子供〟のようなものはついていたと思います。」

と師は語る。
　そうなのである。クンダリニー・ヨーガを成就したときから、彼は徐々に他心通の世界に足を踏み込んでいったのだ。いや、他心通だけではなく、他の神通力も身につけていったのである。
　クンダリニー・ヨーガの成就。——それは、三年前のことであった。

◉涙が心のけがれを洗い流して……

　八八年暮れ——。選ばれた数十名の修行者の中に、ウルヴェーラ・カッサパ師の姿が見られた。クンダリニー・ヨーガの成就に向けての極厳修行（きょくげんしゅぎょう）に励んでいたのである。
　極厳修行というのは、成就を目指して瞑想、プラーナーヤーマ（調気法）等を限界まで行なう集中修行である。
　修行は厳しかった。修行に対して苦手意識があった師にとっては、肉体的にも

きつく感じることもあったが、それ以上に精神的にきつかった。自分の中に潜んでいた煩悩に気づき、がくぜんとしたのである。今まで悩まされていた煩悩にもう一度真正面からぶつかり合い、もがき苦しむこともあった。

修行中、師は何度か涙を流した。

「なんて自分はけがれているんだ……。どうしようもない。」

性欲、食欲、プライド……現世にいたころの自分は煩悩を満たすことしか考えていなかった。出家してからも、煩悩にまみれていたこともあった。他人の本当の意味での幸福を考えるなどとてもできなかった。苦しんでいたときいつも手を差し延べてくれた尊師の慈愛にも、応えることができなかった――。

様々な思いが渦を巻き、涙が心の奥底から込み上げて、頬を濡らした。涙で、顔がぐちゃぐちゃになっても師は泣き続けた。

この愛欲界（欲六界）の一つ、人間界に生まれた魂はもともとけがれているといわれている。もし、煩悩を滅し、自分の利益よりも他の魂の幸福を考えること

ができていたなら、わたしたちは、この欲望の世界ではなく、もっと高い幸福な世界へ転生していたはずなのだ。

しかし、わたしたちは煩悩にまみれているがゆえに、この愛欲界に生まれ出てしまったのである。

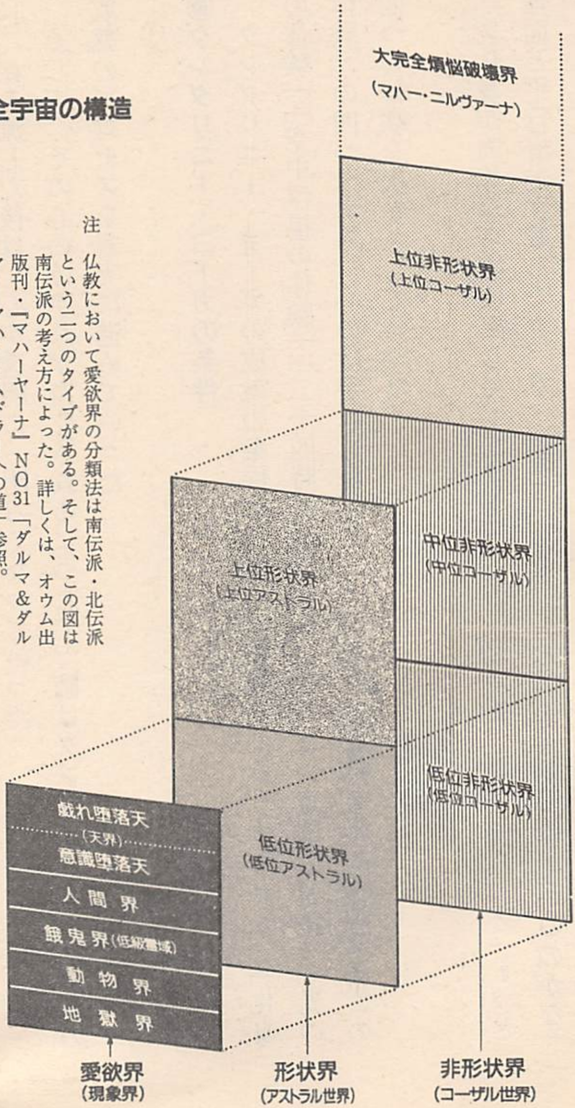
普通、わたしたちは、このことに気づいてはいない。つまり、自分自身が煩悩によってけがれているということを理解していない。ものがありのままに見えていないがゆえに、自分を「美しいものだ」と錯覚しているのだ。

修行を続けていくと、まず、この自分の煩悩に気づく。すべてがけがれていると、それがけがれているということを理解することはできないが、少し清らかな部分ができてくると、その対比でけがれている部分がわかるからである。

ウルヴェーラ・カッサパ師も、成就を目指した極厳修行に入り、清らかになっていくにつれて、自分の中に何が存在しているか気づいたのである。

とめどもなく涙が流れていった。苦しんだ。しかし、そのうちに、いつしか師

全宇宙の構造



注　仏教において愛欲界の分類法は南伝派・北伝派という二つのタイプがある。そして、この図は南伝派の考え方によった。詳しくは、オウム出版刊・『マハーヤーナ』NO31「ダルマ&ダルマ――マハー・ムドラーへの道」参照。

の心のけがれも浄化されていった。まるで、清らかな水がすべてを洗い流すように、涙を流した後は、心が透明に、明るくなっていった。

そして、その心のけがれが浄化されるにつれて、師はクンダリニー・ヨーガの成就のプロセスを着実に進めていった。

◉クンダリニー・ヨーガの条件

クンダリニー・ヨーガの成就の条件は、四つの体験である。すなわち、「化身(けしん)の体験」「空中浮揚の体験」「二十四時間途切れることのない意識の連続」「光の体験」の四つである。心のけがれを浄化し、一つの心の成熟を来した師は、この四つの体験を次々としていった。

「※変化身(へんげしん)が肉体から抜け出して、フワーッと宙に浮いて、シューッ、シューッと地面と平行滑走するんです。で、『あっ、本当に自分の肉体が浮いているのかな』

※修行が進むと使うことのできる特別な身体。低位アストラル世界で活動する。

と思って、『じゃあ、見てみようか』と意識を肉体に戻すと浮いていないと。
似たような体験では、アストラル世界でグラウンドに降りると、尊師がいらっしゃって、『そろそろ浮くからやってみろ』と言われるんです。そうすると、手印を組んだまま、自分の体がフワーッと浮いて、『あっ、浮いた！』と思った瞬間に、肉体の意識が戻ってしまいました。でも、まだ完全には戻っていなくて、半分変化身に意識が移ったままだったみたいで、手は両わきにつけているはずなんだけど、まだ手印を組んだままのような感触がしていました。
この他にも、シャヴァアーサナのとき変化身の体験はたくさんしました。
ダルドリー・シッディ（空中浮揚の前段階）は、ヴァヤヴィヤ・クンバカ・プラーナーヤーマをやっているときに起きました。実は、窓を開けっ放しにして修行をしていたんで、すごく寒くて、やってもやっても寒いから着る物が一枚ずつ増えていったんです。でも、いくら着ても暖かくならなくて、『寒いと思ったら、脱ぐぐらいじゃなければダメだ』という尊師のお言葉を思い起こして、思い切っ

てシャツ一枚になってやったんです。そうしたら、いきなりバーッとクンダリニーが昇って、ダルドリー・シッディが起きたんです。

意識の連続は、瞑想に入ってからだんだんと二十四時間意識が途切れることがなくなっていきました。つまり、全く眠気を感じないようになって、完全な覚醒状態になっていったんです。」

「化身の体験」「ダルドリー・シッディ」「意識の連続」……と修行を進めていった師の最後の決め手となったのは、「光の体験」だった。

——真っ暗な瞑想室。アイマスクをかけていた師の眼前に、ボワーッとした光が見え出した。

「これは、何だろう。」

周囲は真っ暗闇。何も見えるはずがないのに……。

そう思いつつ、さらに瞑想修行を続けていくと、光はどんどんどんどん強くなっていった。そして、ついには、フラッシュのように鋭く、透明で、まぶしい光になった。まるで、夜空に光る星の非常に大きなものが、いや、それ以上にまぶしい光が、まばたいているようだった。

前方から、光が自分の身体に降り注いでくる。まぶしくて、まぶしくてたまらない……。

この強烈な光の体験の後、師は尊師によって最後の煩悩の引っかかりを取っていただき、心が完璧に静まった状態に到達した。

八八年十二月十日。師は、ついにクンダリニー・ヨーガの成就を果たしたのである。

◉この光をすべての人に！

自己の壁を乗り越えて成就を果たした師は、「この光をすべての人に」という熱い救済の意欲を胸にオウム真理教東京本部に向かった。心は明るく、生き生きとして、身体も軽い。心も身体も光に包まれている。

師は、自分のなした素晴らしい体験をベースに、信徒、一般の人に真理の法を伝えていった。彼らの悩みを聞き、それを解決しようと心を砕いた。

そうした活動を続けるうちに、師は、いろいろな神通力が知らないうちに身についているのに気がついた。それらは、天耳通などはまだレベルの低いものであったし、他心通もステージの高い人々のものに比べるとまだ〝子供〟のようなものであったが、成就前と成就後、確かに何かが変化しているのに、ウルヴェーラ・カッサパ師は気がついていた。

「その人それぞれで引っかかっている煩悩というものがあるわけですけれど、人

と接するとその煩悩に対応したチァクラが痛んだりするんです。つまり、その人のけがれているチァクラが痛んで、

『あなたは、こういう煩悩がないですか。』

と聞くと、それがぴったり合っていたということが何度もありました。

あるいは、胸が痛むんで、なんでかなあと思っていたら、

『実は、胸が痛むんです。』

と言われたりとか。つまり、その人の体の痛いところに感応するんですね。

ただ、このころは、だれでもわかるというわけではなくて、特に状態のひどい人にのみ感応していたという感じです。」

クンダリニー・ヨーガの成就をすると、六神通の萌芽のようなものが内在するという。どの神通力がよく発現するかは、その人によって違うわけであるが、ウルヴェーラ・カッサパ師の場合、特に他心通に長けていた。

ただ、まだこのときは、本人が言うようにほんの小さな子供のような神通力ではあったが……。

「ああ、他心通がついたんだな。」

と、師が本当に感じ始めたのは、それから約二年後、次のヨーガ、マハー・ムドラーの成就に向けて、かなり長い時間を修行に割き出したころであった。

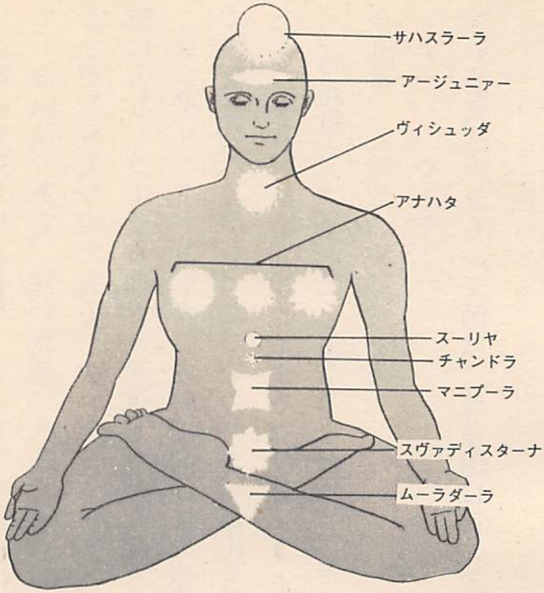
ある一つの出来事をきっかけとして、急に他心通の世界に入っていったのである。

◉他心通の世界へ

その出来事――それは、一見何の脈絡もないように思われる〝蓮華座への挑戦〟であった。

「蓮華座を五時間組まないとダメだ。」

※コラム1　48ページ参照。



チァクラ図

名称	部位	対応する煩悩
アージュニァー	眉間	現世願望、意・観念についてのとらわれ 楽に対する執着（接触せずに得られる類いの快楽） 慢（満ち足りているという考えにとらわれている状態）
ヴィシュッダ	のど	地位・名誉欲 地位・名誉欲を満足させるための闘争心、その裏の嫉妬心、口のカルマ（特に悪口・両舌など、地位・名誉を得るために関係するもの）
アナハタ	胸	プライド　情（非血縁者に対する）
マニプーラ	へそ	食欲　学問、才能に対する執着
スヴァディスターナ	下腹部	性欲　異性、父母に対する執着 詩に対する執着
ムーラダーラ	尾てい骨	嫌悪　物質に対する執着

【チャクラの示す煩悩】

マハー・ムドラーの極厳修行の準備に入ったとき、麻原尊師にそう言われて、師は五時間の蓮華座に挑戦した。蓮華座とは、日本ではよく結跏趺坐として知られている座法である。深い瞑想に入るためには、安定した座法で長時間座り続けることが不可欠なのである。マハー・ムドラーの成就に到達するためには、深い瞑想に入り、コーザル世界に到達しなければならないからだ。

クンダリニー・ヨーガの成就に向けての極厳修行の際、師は、三時間の蓮華座に挑戦したことがあった。そのとき、途中までは痛くて痛くてたまらない足がふっと楽になり、三時間組めるような状態になった。しかし、観念から、そのときは「三時間組めたら十分」と思ってしまい、それ以上長く組もうとはしなかった。

今度は、五時間の挑戦である。

「ようし、やるぞ！」

強い意気込みをもって師は、蓮華座に挑んでいった。

――しっかりと両方の足を組む。

瞑想を続けるうちに、徐々に徐々に時間が経っていった。

一時間、二時間……。まだ大丈夫だ。三時間、三時間三十分……。痛い、だんだん痛くなってくる。四時間……。痛い!

膝が痛い! ふくらはぎが痛い! 足首が痛い! だんだん痛みが足先に移行してくる。

痛い!!

……その瞬間、ウルヴェーラ・カッサパ師の足先から痛みがスポーンと抜け落ちた。

「――そのときからでした。他心通がついたんです。」

◉相手の状態が手に取るように

ここで、他心通についてもう少し詳しくご説明しておこう。他心通というのは、「相手の心に自分の心が感応し、何となくわかる」「相手の発するヴァイブレーションを察知する」「視覚的に相手の心を見る」という三段階のステップに別れる。ウルヴェーラ・カッサパ師のグル（宗教上の指導者）である麻原尊師は、もちろんこの「視覚的に相手の心を見る」という最高の他心通が縦横無尽に使える。

弟子であるウルヴェーラ・カッサパ師の場合、最後の「視覚的に相手の心を見る」というところまでいかないが、蓮華座の痛みが抜けた段階で、第一段階、第二段階の他心通がついたのである。それは、自分で意識しなくても相手の状態がこちらに移ってくる——という状態であった。

「そのとき、ちょうどクンダリニー・ヨーガの成就に向けて数十名のサマナが道場で極厳修行をしていたんですが、僕は、一日のうちに何時間か彼らの指導に当

たっていたんですね。
それで、自分の修行が終わってから、道場へ行って、修行をしている人のそばに行くと、その人の状態がそのまま自分に移ってくるんです。」

足が痛くて苦しんでいる人のそばにいくと、すぐに足が痛くなる。無智に覆われている人であれば、眠くなる。サットヴァ（智性）のエネルギーに包まれている人なら、楽になる。修行が進んでエネルギーが上がっている人なら、自分もエネルギーが上がってしまう。

五メートル以内に人が近づくと、自分のものとは異質のエネルギーを感じるのだ。

「なんだ。これは……。」

初めは何が何だかよくわからなかった。しかし、相手に自分が感じている状態を確認してみると、確かにそうだという。

「他心通だ。」
ウルヴェーラ・カッサパ師は、自分に他心通がついたことをやっと認識した。

◉磨かれる神通力

このころ、修行だけではなく半分ワークをしていたせいで、師に心を見抜かれた体験を持つサマナは多い。冒頭のタントラジェーンティー師の話もこのときのことである。

この修行とワークが混じった生活を数カ月続けた後、師は、麻原尊師の指導により、本格的にマハー・ムドラーの成就に向けての二十四時間の瞑想修行に入った。このときは、尊師が瞑想なされている部屋のすぐ下の階で修行をしたせいもあって、神聖なエネルギーを十分に受けることができ、より心が純粋に、エネルギーが強くなっていった。そのせいで、いろんな神秘体験をし、他心通をはじめとした神通力もどんどんと磨かれていった。

例えば――。こんな話がある。

――一緒に修行をしていた法友が食事を終えて、部屋に入ってきた。

「ん？」

ウルヴェーラ・カッサパ師は、急に自分の胃が腫れてもたれてきたのに気づいた。

もしかして……。

「ずいぶん、胃が重そうですね。」

と、ウルヴェーラ・カッサパ師はその法友に言ってみた。ドキッとした表情の相手。

「……実は、ちょっと食べ過ぎて……。」

ばつが悪いように笑って、その法友は答えた。その日、彼は、普通の修行者が食べるよりも、はるかに多く食べていたのである。

また別の日――。

瞑想をしていると、急にパッとヴィジョンが目の前に広がった。

ソースを塗ったおいしそうな〝お好み焼き〟。

「何だ？　これは。」

自分の煩悩だろうか？　でも、別にお好み焼きなんか今食べたくないのに……。

不思議に思ったウルヴェーラ・カッサパ師は、隣で修行をしていた法友にそれとなく聞いてみた。

「もしかして、お好み焼きが好きなんじゃないですか？」

「えっ！　そうです。何でわかるの？」

びっくりしたのか、思わず相手は声を大きくした。ちょうどそのころ、彼はお好み焼きのヴィジョンを見ていたのだ。

――こういう例は枚挙にいとまがなかった。二十四時間、絶えずだれかと共に修行をしていたため、その人たちの状態が即移ってきたのである。

◉遅れていた心の成熟

こうしてウルヴェーラ・カッサパ師の修行は順調に進んでいった。いや、正確にいうと、霊的プロセスは順調に進んだ。

しかし、一方では、心の成熟はなかなか進んでいなかった。心の非常に奥深い部分に巣くう煩悩は、なかなか取り去ることができなかったのである。

「徐々に修行は進んでいったんですが、やっぱり霊的プロセスはともかく、心の成熟が遅れていたと思います。

僕は、戯れ堕落天（天界）のカルマ（業）が強くて、まだまだ煩悩的な楽しみを喜ぶ傾向があるんですね。それが、やっぱりなかなか根強く心の中にあって、

取れなかったんです。

また、他心通で、喜びを受けたときはいいけれども、苦しみを受けたりしたときは、嫌だという心が生じていたんですね。本来は、麻原尊師の説かれている修行の道を歩いている弟子だったら、そのような他人の苦しみを受けたときこそ、喜びとしなければならないんですけれども。まあ、僕の場合、先程の戯れ堕落天のカルマもせいもあるのかもしれませんが、そう思えなかったんです。」

こういった心のけがれを、おそらく尊師は見抜かれていたのだろう。ウルヴェーラ・カッサパ師は、数カ月して、極厳修行から出され、普段のワークに戻された。もう一度、ワークを通じて功徳を積み、マハー・ムドラーのベースの修行を固めることとなったのである。

◉いつの日か最終の解脱を

現在、ウルヴェーラ・カッサパ師は、マハー・ムドラーの成就を目指して、日々のワークに励み、そして暇を見ては修行にいそしんでいる。

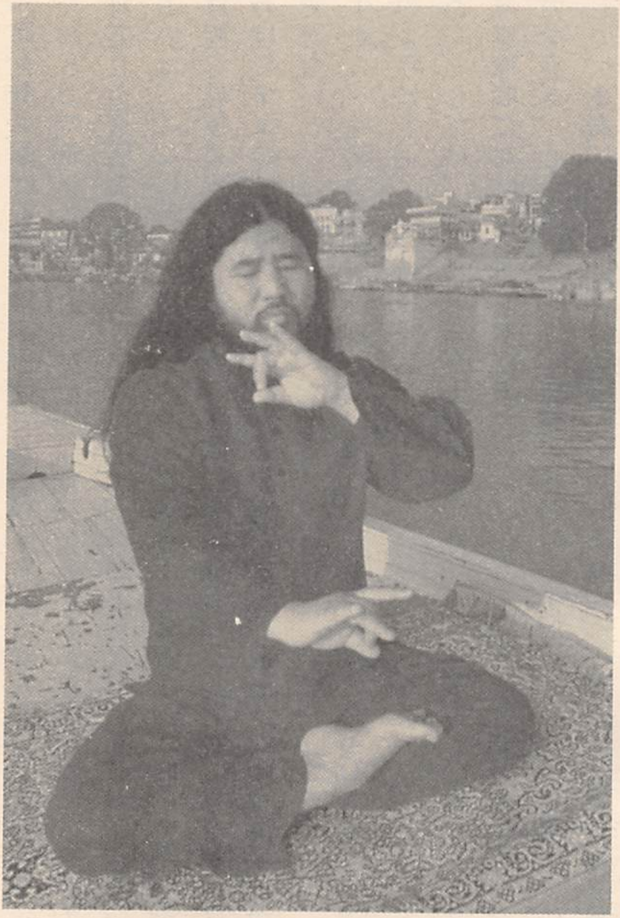
神通力については、やはり極厳修行に入っていたときの方がいろいろな体験をしたようで、他心通についても今の方が例は少ないという。かといって、周りの声を聞いてみれば、やはり、前に挙げたような例はたくさんあるようだ。

これまでの修行を振り返り、今、師は何を思うのだろうか。最後に師は、こう語った。

「極厳修行に入っていたときは、他人の苦しみが移ってくるのがつらかったんですけれども、今はそれもほとんどなくなったような気がします。それは、修行から出て鈍感になって、人の状態があまり顕著に移ってこなくなったというのがあるかもしれませんが、僕としては、少し抵抗力がついたんじゃないかなと思って

います。
　つまり、尊師の言われるとおり修行を進めていくうちに、心の成熟も含めて全体的な修行ステージというのが少し上がったんじゃないかなということです。最終的には、尊師のように相手の状態が手に取るようにわかりながら、そこで全く苦しみがないということになるといいなと思いますね。
　まあ、神通力については、他心通だけではなく、他の神通力もつけていきたいと思っています。天耳通とかは若干あるんですが、まだまだですから。もちろん、他心通だって尊師をはじめとした上のステージの方々に比べたら、ほんの小さなものですけれどもね。
　なぜ、神通力が欲しいのかというと、神通力があるか、ないかというのでは全然違うんですね。それは、自分のエゴを満たせるというわけではなく、尊師の意思されているすべての魂の救済にすごく役に立つんです。というより、これは尊師もおっしゃっているわけですが、神通力がなければ救済はできないわけです。

人の心を読む——修行で得た他心通の世界



他心通を例に挙げるときなんかはそうなんですが、その人がどこのチャクラで引っかかっているということがわかれば、そのチャクラに対応した適切な指導ができます。でも、神通力がないとそれができないと。あるいは、ここに苦しんでいる人がいた場合、なぜ苦しんでいるのか、その本当の原因を見極めるには、その人の本質的な煩悩を知ることができなければならないわけですよね。煩悩こそが苦しみの原因だから。でも、これも漏尽通がなければできないと。

ですから、完璧な神通力があって、初めて完璧な救済ができるのだと思います。尊師のように——。

わたしとしては、ここまで引き上げていただいた、素晴らしい世界を教えてくれた麻原尊師に対して恩返しをするために、生きている限り修行ステージを上げ、神通力を磨き、心を成熟させて、尊師の救済のお手伝いをしたいと思っています。

そして、まあ、いつのことになるかわかりませんが、尊師のように最終解脱を

させていただけたら——と思っています。」

いつの日か、グル麻原彰晃尊師のように、広大無辺な心と完璧な神通力を——。ウルヴェーラ・カッサパ師の修行の道は、これから先もはるかに続いていくのである。

C O L U M N — 1

◎最終解脱に至るまでの六つのヨーガ

一、ラージャ・ヨーガ

強靭な意志力を背景としたヨーガ。現在のインド・ヨーガでは、このラージャ・ヨーガが主流である。ただし、インドでは十年に一人、二人しか成就しないといわれている。

二、クンダリニー・ヨーガ

生命エネルギーのヨーガ。尾てい骨に眠るクンダリニー・エネルギーの覚醒、上昇によって煩悩(ぼんのう)を昇華する。

三、ジュニアーナ・ヨーガあるいはマハー・ムドラー

分析智のヨーガ。自らの煩悩を思索によって分解する。このヨーガの成就をもって小乗の完成とされる。仏典でいう〝阿羅漢(あらはん)〟の境地。

四、大乗のヨーガ

三つのヨーガの成就をベースに、四無量心(しむりょうしん)(聖慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無頓着)の実践をなすヨーガ。

五、アストラル・ヨーガ

報身(ほうしん)のヨーガともいう。この段階まで

来ると、「魂の救済」以外には全く頓着がなくなる。

六、コーザル・ヨーガ

　コーザルでデータの入れ替えを行なうヨーガ。このヨーガを完成して最終解脱をすると、すべてが自由になる。

　おわかりのように、ここで取り上げているクンダリニー・ヨーガは二番目の成就である。つまり、クンダリニー・ヨーガの成就自体は非常に素晴らしいものではあるが、実はそれはまだ途中の段階なのだ。それから先には、もっと高い絶妙なる修行の世界が広がっているのである。

　なお、付け加えるならば、現在オウム真理教ではラージャ・ヨーガの成就者が約百五十名、クンダリニー・ヨーガの成就者が約百名、マハー・ムドラーの成就者が八名、大乗のヨーガの成就者が三名存在する。

　マハー・ムドラー、大乗のヨーガの成就者の体験は、『ザ・サマディ』『原爆覚醒』『秘儀の世界』（いずれもオウム出版）などを参照していただきたい。

瞑想の究極——サマディの境地

※クンダリニー・ヨーガの成就に加え、規定の瞑想修行をこなした者は、正師と呼ばれる。

◉求めるものはもう何もない

「そのとき、わたしの心は満ち足りて、求めるものはもう何もなかった。周りは自己の内側の光で照らされ、その明るい空間の中でわたしは座っていた。
　意識は完全に覚醒し、いっさいの雑念はわいてこない。今までに体験したことのないすべてが静まった状態だ。
　……わたしは、自分の呼吸が完全に止まっているのを認識した。」

　アヌーパマ正師（※せいし）、二十七歳。本名、上田竜也。一九九二年一月、クンダリニー・ヨーガの成就を果たす。そのとき、彼は〝サマディ〟に入り、寂静（じゃくせい）の境地を体験した。
　サマディとは、日本語で三昧（さんまい）と音訳されている瞑想の究極状態である。仏教では呼吸の長さは煩悩の少なさと比例するといわれているが、修行で煩悩を止滅（しめつ）していくと、この境地に到達することができるのだ。このとき、呼吸は完全に停止

し、食べなくても、飲まなくてもいい状態が現出する。

古今東西、真の聖者と呼ばれた人々は、皆このサマディに入り、様々な逸話を残した。サキャ神賢(しんけん)（釈迦牟尼(しゃかむに)）しかり、イエス・キリストしかり。サマディとは、聖者の条件ともいえるものであり、それほど高いステージなのである。

オウム真理教では、この境地を得た者が数多く存在する。そして、彼もその一人となったのである。それは、麻原彰晃尊師の指導のもと、オウム真理教のイニシエーション（秘儀の伝授）を駆使した特別な修行に入り、約一カ月後のことであった。

このような成就を果たした彼は、いったいどのような人生を歩んできたのだろうか？　サマディに入ることを可能にした「特別な修行」とはどのようなものなのだろうか？　彼はどのような「光の体験」「空中浮揚」などを体験したのだろうか？

アヌーパマ正師は、そのすべてを静かに語ってくれた。

◉〝普通のサラリーマン〟だった

「――本当にどっから見ても普通のサラリーマンだったんですよ。」

とアヌーパマ正師は、穏やかに笑った。今から思えば、オウム真理教に巡り合うまでの自分が幻のように感じられたのだろうか。

「地元の商業高校で、商業実践と簿記なんかを学びまして、卒業するとそのまま電気会社に入社したんです。会社では、ずっと内勤で、総務兼経理をやっていました。

仕事は順調でしたね。人間関係も一応うまくいってたし、信用もそれなりにありました。会社は安定していましたし、このままいけば係長、課長というラインができ上がっていました。全く平凡な型どおりの生き方で、別に人にない特別な能力があったわけでもないし、際立っていたわけでもありません。」

要するに、一言でいうならどこにでもいるただの人だったわけである。それが、



修行の本場インドでも滅多にいない「クンダリニー・ヨーガの成就者」となるのだから、運命とは不思議なものだ。その人生の転機は、一冊の本との出会いであった。

「入社してから、即仙台の方に転勤になって、そこで四年間過ごした後、また盛岡の方に転勤になったんですが、そこで『マンガ滅亡の日』（オウム出版・作：麻原彰晃）と出会ったんです。

わたしは、中学生ぐらいから結構、精神世界とか、心理学に興味を持って、その類の本をたくさん読んでいました。で、まあ、徐々に好みが変わってきて、マンガが大好きになっていろいろ読んでいたんですけども。それで、そのころ書店で、たまたま見た『マンガ滅亡の日』を何気なく買ってしまったんですよ。そうして読んだら、ものすごいインパクトを受けましてね。なんと一カ月もその一冊の本を読み続けたんです。そして、その後、いてもたってもいられなくなってオ

ウム真理教に入信しました。」
一冊の本に導かれて、オウム真理教に入信した正師は、即出家を考えた。読者の方の中には、「えっ、即出家?」と驚く方もいらっしゃるだろうが、正師は、もともと直感的に「ここは本物だ」と感じていたという。加えて、入信してすぐ「光輝くヴィジョンを見る」「エネルギーが上がって頭頂がしびれる」などの様々な神秘体験をし、教義を学んでその確信を深めたので、出家をすることを決心したというのだ。
これほど唐突に出家を望んだのは、小さいころ親族の死に直面して〝無常〟を感じ、心の空虚さは物質的な豊かさでは埋め合わすことができないということを知っていたということもあったのだろう。「無常を乗り越えた絶対的な幸福を得るために人生をかけてみよう。ここにはその術(すべ)がある」――正師は、そう思ったのである。

◉どんどん静まる煩悩

八九年八月に出家し、それから約二年半後、正師は前述したように見事クンダリニー・ヨーガの成就を果たした。「無常を乗り越えた絶対的な幸福」を得る大きな一歩を踏み出したわけである。

元来こつこつと努力する性格であった正師は、出家してからも真面目にワークに、そして瞑想などの行に励んでいた。その結果、知らず知らずのうちに強い精神力を身につけ、九〇年の一月には〝強靭な意志のヨーガ〟ラージャ・ヨーガの成就をいち早く果たしている。

その後、煩悩(ぼんのう)に振り回されて必死で闘うこともあったが、少しずつステージを上げ、約一年後、次の〝生命エネルギーのヨーガ〟クンダリニー・ヨーガの成就を目指して、正師は極厳(きょくげん)の修行に入ったのである。

「区切りとして、三回ほど修行に入ったんですよ。

まず、九〇年の十一月に、阿蘇のシャンバラ精舎で一回目の修行に入りました。修行メニューは、教学と立位礼拝です。富士山総本部道場に移ってからは、ヴァヤヴィヤ、アパンクリヤなどのプラーナーヤーマも加わりました。

このときの修行では、前々から引っかかっていた食の煩悩が噴き出してきました。あとは、嫌悪ですね。寒さに対する嫌悪。そして、修行の指導をしてくださる師に対する嫌悪。ヴァヤヴィヤ、アパンクリヤのときは、普通修行者は裸でやるんですけど、わたしは嫌だからって着たままやってたんです。プラーナーヤーマをやると、トゥモ（熱のヨーガ）が起きるから本来は寒くないはずなんですけど、限界までやっていなかったということとやり方が正しくなかったということが原因で、トゥモが起きなかったんですよ。それで、寒いから嫌だと。着たままやると。そして、『それでは修行は進まないよ』と注意をしてくださる師に対して嫌悪を抱いていたんです。

それが、あるときスーッと不思議なほど消えてしまったんですね。この嫌悪が

消えたというのが、この期間の修行で得た一番の収穫でした。食の煩悩の方は相変わらず消えませんでしたけど。

神秘体験も、一応いろいろとしました。頭頂はもうしびれっ放しで、甘露（かんろ）が頭頂から落ちて、冷たいクンダリニーが上がる。もうとにかく気持ちがいいという……。ダルドリー・シッディ（空中浮揚の前段階）も起きまして、変化身の体験もしました。

で、『あ、いいところにきたなあ。成就まで行けるかもしれない』って思ったところで、修行を出されて、ワークに戻されたんです。」

食の煩悩――。グルメが蔓延（まんえん）している日本では、みんな「おいしいものが食べたい」ということが、煩悩であるなどとは思ってもいないが、仏教では、これは確かにわたしたちを苦しめる煩悩の一つに数えている。仏教の修行では、人間ならだれでも持っているこの食欲でさえ止滅しようとするのだ。アヌーパマ正師は、

この食の煩悩と闘い、そしてオウム真理教の教えに従って修行を実践するうちに、徐々に徐々にそれを克服していった。

「修行から出てきたときには、自分は本当に貪りが強いんだなあということを実感しましたね。それで、自分はけがれていると。だから、真理のデータを入れて、欲望を肯定するデータと入れ替えなくてはいけないと。そう思ってからずっと教学、つまり真理の法則を学ぶことを心がけてきました。ワークをしながら、尊師の説法テープをひたすら聴き続けて、また、『欲如意足』『喜覚支』といった瞑想もしました。

それから、しばらくして六月にワークをしながら一日十二時間の修行を命じられたんです。内容は、『マハーヤーナ』（以前の教団機関誌）を読むと。ただそれだけでした。そして、九月には、完全な極厳修行、二十四時間の経行教学修行に入ったんですよ。」

経行というのは、二千五百年前のサキャ神賢の時代にも行なわれていた精神を統一して歩く修行のことである。正師は、一日約二十キロほど歩き、あとは、ひたすらまた教学に専念した。

「この長きにわたる教学修行で、教学の効果というものを実感しました。けがれ切っていたデータが、少しずつですが浄化されていき、煩悩が静まってくるのを感じました。

経行が入ってからは経行の効果も非常に感じましたね。経行では集中力を培えたと思います。面白いもので、意識して集中すればするほど、歩くスピードは速くなり、集中しなければ遅くなるんですね、あれは。それと、経行はエネルギーをすごく上げるんだなというのもわかりました。

この経行と集中して学ぶ教学の効果で、修行ステージはどんどん上がっていったと思います。」

◉秘儀・奥儀を結集した修行

その後、またワークのために一日の半分のみ経行教学修行をやることになったが、正師はそれに対して何の文句も言わずただ黙々と修行とワークに打ち込んだ。そんな正師に、突然、画期的な修行の話が飛び込んでくる。

「十一月に、突然尊師からサマナに伝達があったんです。『来年一杯でサマナ全員、クンダリニー・ヨーガの成就をさせる』と。そして、『まず、初めに四十名修行に入れて、四十名きっちり成就させる』と。もうみんないっせいにわき立ちましたね。そして、その選考は、今から行なうから、我こそはその修行に入りたいと思う者は『決意文』を書きなさいと言われたんです。

それで、わたしはもう絶対成就したいと思っていましたから、決意文に、『とにかく全力でやります。グルの与えられた修行を全力でやります。』

と書いたんですね。
――そのせいでしょうか、尊師に十二月からの第一陣の極厳修行に入れていただいたんです。」

こうして正師は再びクンダリニー・ヨーガに向けた二十四時間の極厳修行に入った。そして、これが、まさに、正師をクンダリニー・ヨーガの成就に直接導いた最後の修行だったわけである。

オウム真理教では、修行を飛躍的に進めるためにイニシエーションというものがある。それは、主に秘儀とされて一般に公開されることのない高度な瞑想法の伝授やグルから弟子に与えられる神聖なエネルギーの移入のことだ。この極厳修行は、まさにこのイニシエーションの連続だった。言い換えれば、オウム真理教の秘儀・奥儀を結集したような修行であったのである。

この特殊な修行によって、修行者たちは著しく修行ステージを上げ、経典に記

されているような高いレベルの体験をしていった。

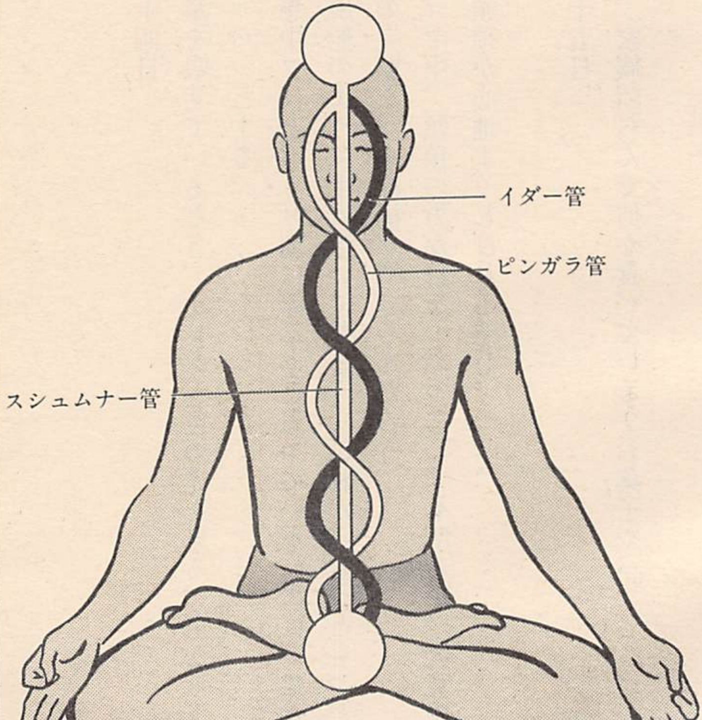
◉光が舞う、体が浮く!

※主な修行プログラム

○小乗のツァンダリー
○教学
○捨断(しゃだん)の瞑想
○グルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーション
○立位礼拝
○グルヨーガ
○大乗のツァンダリー
○ヴァヤヴィヤ・クンバカ・プラーナーヤーマまたは、アパンクリヤ

○究竟の瞑想
○経行
（小乗のツァンダリー、グルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーション、グルヨーガ、大乗のツァンダリーとは、いずれも世界で最高峰に属する瞑想技法である。
なお、食事はすべて麻原尊師のエネルギーが込められたものであった。）

●十二月二十日
昨日の経行後の究竟の瞑想で、左手が冷たくなる。左側に白いぼんやりした光が見える。今日の経行後の究竟では、右手が冷たくなる。最後は頭頂が冷たくなる。イダー、ピンガラ、スシュムナーの三管の浄化か。尊師によると頭頂が冷たくなるのは、「不死の甘露」だろうということ。
究竟中に、意識が飛ばされる（寝てしまう）。情報に弱い人間は飛ばされると



三管の図

いうこと。

●十二月二十四日
瞑想で詞章を唱えているとき、オレンジ色の光を見る。上から下へオレンジの光がパッパッパッパッとする。
究竟の瞑想中フッと浮く。別に浮こうと思っていないのに、無意識のうちに、体がフッと風船のように上に浮いてしまう。これが、もっともっと高くなれば数メートルもの完璧な空中浮揚ができるんだろう。
ヴァヤヴィヤ中、頭頂の方が目をつぶっていても明るい。究竟中も、頭頂が明るくなる。頭頂が心地よくしびれる感じ。

●十二月二十五日
究竟中に、家族団らんで何か食べている。お菓子やパン。

ヴァヤヴィヤで、観想ができるようになった。詞章中、頭頂に意識を集中すればば飛ばないが、少しでも集中がずれると寝てしまう。

「食の煩悩はこの前の修行で少しずつ取れてはいったんですが、まだまだ切れていなかったんです。ですから、この煩悩は、結局この修行に入ってからも引きずって、最後の最後まで残りました。

あとは、それから、瞑想中意識が飛んでしまうんですね。クンダリニー・ヨーガでは、二十四時間全く途切れない意識の連続性がなければならないわけですけど。

この極厳修行では一般的にいう睡眠時間はありませんでした。もちろん、究竟の瞑想は、睡眠よりも心と体を解放する特殊な瞑想ですから、詞章を唱えているときにしっかりと集中して、究竟の瞑想で一気に心身を解き放てば、睡眠時間は全く必要ないはずなんですけど、集中が外れると寝てしまうんですよね。」

◉的中した未来予知

●十二月二十八日

経行中、意識がボーッとしたとき、突然体が浮く感じがする。詞章中は、光がオレンジから黄色に変わる。光が全体的に上からサーッと降りてくる。太陽のような白銀色の光だ。

●一月一日

太陽のような白銀色の光に包まれて、その光の中に溶け込んだ。すべての魂に慈愛、哀れみを降り注ぎ、すべての魂の善行を誉め称え、すべてのカルマの現象に対して頓着しないという四無量心の瞑想をしていると、心の底から喜びとうれしさが込み上げてくる。喜びとうれしさが込み上げてくると、自分を包んでいる光が強まった。

●一月四日
詞章を唱えていると、目の前が透明な光をちりばめたようにキラキラと光る。まるで小波(さざなみ)に輝く光のよう。

●一月五日
詞章を唱えるのが楽しい。楽しくなればなるほど、速く唱えられる。詞章に溶け込むような感じだ。

●一月七日
アパンクリヤで、最後の入息のとき、上からふわーっといろんな大きさの光の粒が降りてくる。その光は、広がりながら体を包み込んだ。赤、青、紫……いろんな色があって虹のようだ。

●一月九日

瞑想中、体に赤い光がまとわりついて燃え出す。

究竟中、こんなヴィジョンを見た。尊師にイニシエーションをいただいた後、尊師が来られて、

「これはなんだ。食の煩悩の空間だ。空間が黄色になっている。これは、良くない。」

と言われて、みんな怒られた。それで、イニシエーションを半分に減らされてしまった。

次の日、ヴィジョンと同じことが起こって驚いた。

「何度か究竟の瞑想中、未来ヴィジョンを見たようなんです。だいたい、究竟の瞑想から覚めた瞬間に忘れてしまうんですけど、これは鮮明に覚えていました。

尊師がわたしたちの修行を進めようと思われて、パンと餅にエネルギーを込め

られてわたしたちにくださったんですが、それを修行者が、修行で煩悩が噴き出しているもんですから、貪ってしまったんですね。そうしたら、その煩悩を尊師が見抜かれてみんな非常に怒られまして。イニシエーションの量を半分に減らされてしまったんです。
で、わたしはそのことを既に前日に知っていたんです。瞑想中にヴィジョンで見て。いわゆる未来予知だったんです。」

◉意識の分化――二つの自分、三つの自分

●一月十日
詞章中、黒いドットがたくさん見えた。この後、雑念の洪水に巻き込まれた。とにかく多すぎるぐらいである。ひたすら、今まで修習(しゅじゅう)したデータが洪水のように押し寄せてきた。
とらわれてはいけない、と思うとだいぶ冷静に眺められた。そのとき、雑念を

眺めている自分と詞章を唱えている自分、「二つの自分」を認識した。意識の分化が起こったようだ。

ヴァヤヴィヤ中、暗性のサマディに入り出した。ヴァヤヴィヤ二、三息した段階で、気がつくと既に二時間終わっていた。その間、意識もヴィジョンも全くない。完全な暗性のサマディ。

●一月十一日

詞章中、右上から黄金色の光が降りてきた。究竟のときには、白い螺旋状（らせんじょう）の光が上昇するヴィジョンが見えた後、それが下から包み込んできて、自分自身が螺旋の白い光の渦に包まれた。

究竟中は、姿勢さえ崩さなければ、意識は鮮明だ。

●一月十三日

意識の三分化が起こった。詞章を唱えている自分と雑念にとらわれている自分。そして、それを見ている自分。

グルヨーガの瞑想は本当に素晴らしい。グルと一体になって歓喜に浸った。

「仏典には、ステージが高くなればなるほど、意識が一元の状態から二元、三元となっていき、最終的には無数の意識を持つと書かれていますが、その一つのステップとして、このとき意識の二元化、三元化を体験したんです。」

◉決死のアンダーグラウンド・サマディに挑戦

秘儀の瞑想と尊師からの絶え間ないエネルギー移入によって、驚異的に修行ステージを上げていった正師は、着実に修行プログラムをこなしていった。そして、グルヨーガの瞑想を終わり、最後の大乗のツァンダリーの瞑想に入ろうとしたそ

のとき、突然、尊師から驚くべきことを告げられた。

「『アンダーグラウンド・サマディィ』に入れ。」

――アンダーグラウンド・サマディとは、密閉して空気の流入をなくした三メートル四方の小部屋（チェンバー）を土中に埋め、その中で何日間も飲まず食わずで瞑想修行を行なうという修行である。

サマディという名がついていることからもおわかりのとおり、この修行はサマディに入ることができなければ達成し得ない。ちょっと考えればおわかりになると思うが、空気の流入がないため、普通に呼吸していると窒息死してしまうのである。しかし、サマディに入ることができれば、呼吸が完全に止まるため、生きていられるのだ。

つまり、このアンダーグラウンド・サマディができるということは、とりもなおさず、その修行者がサマディに入れるということの証明であり、また、サマディの存在そのものの証明でもあるのである。

「それまでも、尊師から、

『アンダーグラウンド・サマディに入れるぞ。』

という話を聞かされていましたが、これほど突然とは思っていませんでしたので、驚きました。何の心の準備もしていなかったんで、少し慌ててしまったんですが、尊師から直接のエネルギー移入をしていただいて、そのまま即チェンバーに入りました。

中での修行は大乗のツァンダリーです。『とにかくひたすら詞章に集中しろ』というお言葉をいただいて、それだけに努めました。」

●一月十四日

意識が飛びそうになると、ドアを閉める音や、澄んだベルの音、女性の声、男性の声が聞こえてきて起こしてくれる。ナーダ音だ。究竟の瞑想中も、完全に意識は鮮明。ふっと、三分間ぐらい全く欲求のわかない状態を経験した。

今日、アストラルで、小乗のツァンダリーの粗雑なグヤサマジャと微細なグヤサマジャの瞑想をやってしまった。今まで味わったことのない、とろけるような歓喜状態。詞章に集中しなければいけないから、

「こんなことをいつまでもやっていたら、時間のロスだ。」

とわかっていたけども、あんまり気持ちがいいので、やめたくなかった。四時間経って、仕方なく口惜しさを感じながら戻ってきたという感じ。グヤサマジャと完全に合一した。

※コラム2　90ページ参照

●一月十五日

輝くブルーの空間が広がった。チェンバーに入る前に見たブルーの光と同じもの。あのときは、光を見ただけだったけど、今度はやっとブルーの空間、という感じ。尊師は「それは八つの克服境の第五克服境だ」と言われていたけど、やっと完全な第五克服境に入ったのだろうか。※

燃え上がるような赤い光も見た。これはまだ光。青の次は本当は黄色い空間のはずだけど、黄色は飛ばしてしまったような気がする。これらのことにもとらわれないようにして、ひたすら詞章に集中する。

●一月十六日

苦しみが出てくる。体が痛い。蓮華座の痛みというよりも、体全体が痛い。瞑想が続けられない。

苦しんでいると、突然、尊師から信じられないタイミングで電話がかかってきた。

「体が痛いのは、それだけ風(ふう)が上がっているからだ。それで、ナーディーが細いから痛みが出てくるんだ。もっと詞章に集中しろ。」

尊師のお言葉で、何とか立ち直る。グルと弟子はアストラルの霊的なパイプでつながっているということを実感。尊師の神通力をまた一つ体験した。

気を取り直して、詞章に集中しようとすると、急に死というものが強く感じられる。強く意識していると、ふっと死に対する恐怖が消える。もう死ぬことは全然怖くないような気がする。

この後にまた詞章を唱えている自分と、ヴィジョンを見ているもう一人の自分が分離した。

……いろんなサマナが走馬燈のようにヴィジョンで見える。――と、それらの人たちに対してすごい感謝の念が込み上げてきた。彼らのお蔭で、自分は修行に入ることができて、こんな素晴らしい体験をすることができたんだなあとつくづく思う。

「修行頑張ろう。」

そんな念を込めながら、ヴィジョンで流れていくわたしの法友たちに一人一人「頑張ろう」と声をかけていった。

――しばらくして気づいたら、痛みに対するつらさがなくなっていた。

●一月十七日

いっさいの欲求がわいてこない。雑念もわいてこない。完全に無思考の状態――。こんな静かな平安な状態は始めてだ。なぜか、このとき過去世らしきもの見た。

この後、煩悩が引きちぎれるように落ちていった。目の前を白い餅のような煩悩の塊がぶちぶちと落ちていく（なぜか、煩悩が塊のように感じられる）。性欲が落ちていく。食欲も落ちていく……。

どんどんどんどん煩悩が落ちいくうちに、強い強い欲求が出てきた。

「もっともっと修行をたくさんしたい。救済しないといけない。この世は無常である。この無常を根本として真理の教えを広めていきたい。」

周りの空間は明るい。グルとシヴァ大神、諸々の真理勝者（如来（にょらい））方に対する感謝の念が込み上げてきた。

――心の中で詞章を唱えながら、わたしは、自分の呼吸が完全に止まっている

のを認識した。

●一月十八日

四日ぶりにチェンバーを出た。尊師にお会いして、少しお話しする。イニシエーションも与えてくださった。本当にありがたい。

尊師のお話では、完全にサマディに入ったということだった。

「最後の修行だ。経行をしなさい。」

と言われて、そのまま道場の周りを経行する。

――すごく気持ちがいい。四日間眠らなかったけど、全然眠くない。なんて綺麗なプラーナなんだろう。夜中だから、氷点下は超えているはずだけど、その寒さが逆に心地よい。

高い世界の神々は、食物を取らずプラーナだけで生きているという。ふっと、



四日間のサマディを終えて、土中に埋められたチェンバーから出るアヌーパマ正師。

自分もこの清らかなプラーナだけで生きていけるんじゃないかという気がしてくる。

「この素晴らしい環境で、みんなも修行してほしい。」

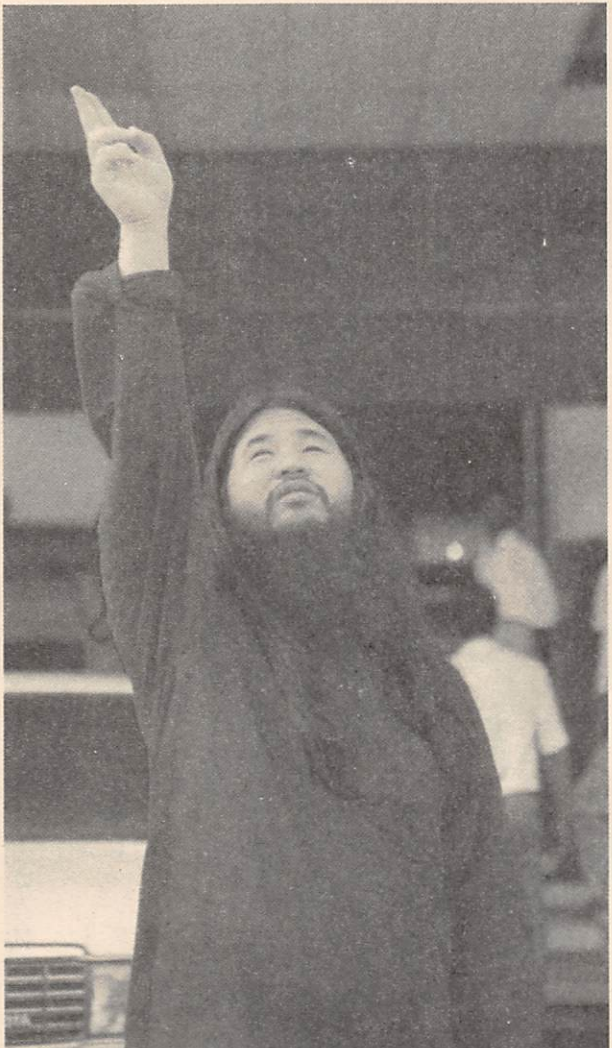
そんな思いが込み上げる。

尊師、シヴァ大神、諸々の真理勝者方、わたしをここまで引き上げてくださって心より感謝いたします――。

◉証明された成就者のパワー

麻原尊師に見守られて、正師は、決死のアンダーグラウンド・サマディを貫徹し、クンダリニー・ヨーガの成就者となった。常人なら死に至る少ない酸素量の中で生きていられたのは、ひとえに正師が修行によって煩悩を止滅していたからに他ならないだろう。冒頭でも述べたとおり呼吸は煩悩に比例するのである。つまり、正師の煩悩は常人に比べて格段に少ないといえるのだ。

瞑想の究極——サマディの境地



それは、読者の皆さんも納得していただけるのではないだろうか。体験談を読めばおわかりになるように、この四日間、完全な断水・断食をしていたにもかかわらず、それに対する苦悩というものは全く見られない。意識についていうならば、完全な覚醒状態にあり、眠気は全く生じていない。

さらに付け加えるなら、排便・排尿もない。普通、男性は一日以上尿がないと生命に危険を来すといわれているが、正師は四日間も排せつがなかったのである。ヨーガ理論によると、エネルギーが上がると排せつしなくなるといわれているが、このときの正師のエネルギーが完全に上昇傾向にあったことの現われである。

この四日間のアンダーグラウンド・サマディは、正師にとっては仏典に記されている体験をした素晴らしい出来事であったが、同時に成就者の驚異的なパワーというものが科学的にデータとして証明された貴重な実験でもあった。

そして、それはとりもなおさず、麻原尊師の的確な指導とオウム真理教の完璧な修行法によって、〝単なるフツウのサラリーマン〟でも人間を超えることがで

きるということの証明でもあったのである。

◉あなたもサマディに入れる

四日間のアンダーグラウンド・サマディを終え、「クンダリニー・ヨーガの成就」を果たしたアヌーパマ正師は、現在、オウム真理教の東京本部で活躍している。今、正師の胸に去来するものは何なのか。最後に正師はこう語った。

「最後まで引っかかっていた食の煩悩は切れました。まだ、チェンバーから出てから三日ぐらいしか経っていないんですが、ほとんど食べてないですね。食べようという気が起こらないんですよ。何しろ、チェンバーから出てからほんの少し重湯とかを食べたんですが、そのときに一番初めに浮かんだ感情が、『食は苦なり』でしたから。食べない方が本質的に楽なんだということがわかりました。この煩悩が切れたということは、すごくうれしいですね。

出てきてからの面白い変化としては、まあ、これは修行中でもあったんですが、他人の状態とか、空間のエネルギーが非常によくわかるようになったことです。例えば、右の気道が痛くなって、ここの空間は怒りのエネルギーが満ちているとわかったり、マニプーラ・チァクラが痛くなってここは貪りの餓鬼の空間だとわかったり。あるいは、この人は今、若干魔境だなとか。もっと、はっきりした神通力というのは、これからついてくるんじゃないですかね。

それから、神秘体験として、今日ちょっと面白い体験をしました。究竟の瞑想をやると、ものすごいスピードで時間が経ってしまうんですよ。意識はずっとあったんですけど、三時間あっという間に経ってしまったという。これは、修行中もあったんですけど、尊師からは「無所有境」の境地だと言われました。でも、こういう体験は、わたしと一緒に修行に入った人はほとんど体験しているんじゃないでしょうかね。

わたしが、今回の修行で実感したことは、普通の人間でも、修行することによっ

て、仏典に記されているような素晴らしい体験をして、本当に高い世界の神々の経験ができるんだということですね。そして、人間に限界はないんだと。限界というのは、単なる観念であって、観念というのは修行によってすべて崩れ去るということですね。

修行することによって、あなたも同じようにサマディに入ることができる、あなたも同じように素晴らしい体験ができる、ということをわたしは今すべての人に心から伝えたいと思います。」

麻原尊師に導かれ、偉大なる〝人間進化〟を遂げたアヌーパマ正師。彼の姿は、修行の素晴らしさを見事に体現していた。

COLUMN—2

◎仏典に記されている「八つの克服境」

※アヌーパマ正師の体験とこの仏典の記述を比較してみると、正師の体験が決して特異なものではないことがおわかりになるだろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら八つの克服境がある。八つとは何であろうか。……（中略）……

一人の人が、心の中に種々の非形状・容姿を熟知し、外側の種々の形状・容姿の種々の青、種々の青い色彩、種々の青い印、種々の青い出現がわかる。例として、ウンマー（きらめき）の花の青、青い色彩、青い印、青い出現のようなもので、あるいはところで、例として、両側につやがあるバーラーナシー（剣の城壁）産のその衣の青、青い色彩、青い印、青い出現のようなものである。

まさにこのように、一人の人が、心の中に種々の非形状・容姿を熟知し、外側の種々の形状・容姿の種々の青、種々の青い色彩、種々の青い印、種々の青い出現がわかる。それらを克服し、『わたしは発見して、わたしはわかる』と、このように熟知する者がいる。これが第五の克服境である。

一人の人が、心の中に種々の非形状-容姿を熟知し、外側の種々の形状-容姿の種々の黄色、種々の黄色い色彩、種々の黄色い印、種々の黄色い出現がわかる。

…（中略）…

まさにこのように、一人の人が、心の中に種々の非形状-容姿を熟知し、外側に種々の形状-容姿の種々の黄色、種々の黄色い色彩、種々の黄色い印、種々の黄色い出現がわかる。それらを克服し、『わたしは発見して、わたしはわかる』と、このように熟知する者がいる。これが第六の克服境である。

一人の人が、心の中に種々の非形状-容姿を熟知し、外側に種々の形状-容姿の種々の赤色、種々の赤色の色彩、種々の赤色の印、種々の赤色の出現がわかる。

…（中略）…

まさにこのように、一人の人が、心の中に種々の非形状-容姿を熟知し、外側に種々の形状-容姿の種々の赤色、種々の赤色の色彩、種々の赤色の印、種々の赤色の出現がわかる。それらを克服し、『わたしは発見して、わたしはわかる』と、このように熟知する者がいる。これが第七の克服境である。…（中略）…

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に八つの克服境である。

帰依の心がもたらした智慧、そして神通力

◉「願望」——その熱き思い

願望

俺たちは本当に幸せなのかな?
この世界、金さえあれば何もかも手に入ると考えている大人たち。
朝夕のラッシュアワー
時間に縛られた中年、
夢を失い、ちっぽけな金にしがみつき、
ぶらさがっているだけの大人たち。
工場の排水が、川を汚していくように、
金が人の心を汚し、大衆を飢え死にさす。

時間に追いかけられ、歩き回る一日が終わると、すぐ、次の朝、日の出とともに人の渦がやってくる。

救われないぜ！　これが俺たちの明日ならば……

逃げ出したいぜ！　金と欲だけがあるこの汚い人波から……

夜行列車に乗って。

アーナンダ師（本名　井上嘉浩）、二十二歳。麻原尊師によって「天才的修行者」と絶賛され、その活発な行動力、高い霊性、明るい人柄のゆえに、サマナや信徒の間で絶大な信望を集めている若き師である。

現在、東京本部道場で支部長を務めている師は、日夜信徒の方のお宅を精力的に駆け回り、集まった一般の方に対して真理の法を説く超多忙の毎日を送っている。その細い身体からのものとはとても思えないような、あふれ出る熱いエネル

ギー、救済に対する並々ならぬ意欲、明快な説法、そして他心通などの鋭い神通力……。救済の最前線に立って、いかんなく発揮する師の才能の数々は、どれ一つとってもまさに天才と呼ぶにふさわしいものがある。

しかし、そのような超人的修行者であるアーナンダ師も、麻原尊師と真理の教えに巡り合うまでには、わたしたちと同じように、人生や社会に対する疑問、その矛盾から生じる悩み、苦しみのために、長きにわたって胸を痛め続けてきたのである。当時のそのやるせない思いは、冒頭に挙げた「願望」と題する、師が中学校一年生のときに書いた詩に如実に現われている。

だが、師は、麻原尊師と真理の教えの導きによって、その疑問と矛盾を断ち切り、人生に対する真実の回答を見いだすことができた。つまり、金と欲望が渦巻く現代社会の中で人々が追い求めるエゴイスティックでつまらない「願望」をはるかに超越した、真に意味のある、真に価値のある、聖なる「願望」を手にすることができたのである。そして、その聖なる「願望」こそが、現在の師のケタ外



れの行動力と驚嘆すべき神通力のエネルギー源となっているのである。
では、現在の師をつくり上げているという、師の胸の内に赤々と燃えたぎる「願望」とは何だろうか？　そこに到るまでの軌跡を振り返ってみることにしよう。

◉苦悩の少年時代

アーナンダ師が今生の生を受けたのは、一九六九年十二月二十八日、京都でのことである。町を貫く清らかな鴨川のせせらぎ、静かなたたずまいをみせる京都の下鴨で、師は父と母、兄弟二人に囲まれて健やかに成長した。
外見上は普通の子供と変わらず、地元の小学校、中学校と順調に進学していった師だったが、その胸中には、常に解決できないわだかまりがくすぶり続けていた。そして、たった一人で人生に悩み、苦しんでいた。
「中学生のころ、いつもと変わらぬ教室のざわめきの中で、一瞬、空間の中に僕が静止している状態になり、今から思えば『真理』に包まれていた思いを経験し

たことがあった。それがなくなったとき、どうしようもない苦しみの中にいる自分、この漠然とした苦しみは、時間が経つにつれ、様々な形で自分をいっそう、苦しませた……。」

冒頭に挙げた詩と並んで、後に記されたこの作文にも、中学時代の師の心中がよく現われている。

運動好きで活発で、みんなから好かれていた師だったが、その明るい外見とは裏腹に、心は一向に落ち着くことがなかった。そして、その状態のまま高校進学を控えた師は、弘法大師の教えを根本にした教育を行なっている高校を自ら選び、進学した。

だが、入学後も、それまで抱き続けてきた心の中のひっかかりは依然解消することなく、かえっていっそうひどくなっていった。師の当時の作文には次のようにある。

「わたしには二つの側面がある。……わたしは不自然である。なぜならいつも仮面をかぶっているからだ。……わたしは走りが得意だ。中学時代、三カ年通して、千五百、二千、三千メートルと、いつも一位だ。わたしは人から誉められたいという思いから、自分はこうでなければならないという仮面を見せる。これを継続することで、いつも不安にかられた。仮面を外した自然な生き方がしたい。……安らぎたい！　わたしはいつも漠然とした苦しみの中で、どのようにすれば、苦しみがなくなるのだろうか、そればっかり考えて高校時代を過ごしてきました。」

仮面を外した自然な生き方、そして安らぎ……。この嘘やタテマエ、ミエや外聞が幅をきかした世の中で、何ものにもとらわれない真に解放された生き方を模索していた師。その回答を仏教に求めて、古本屋から購入してきたサキャ神賢（釈迦牟尼）の本が師の本棚に目立ち始めたのは、高校二年の夏休み前後からのことだった。

◉歩むべき道がここに！

そうして精神世界をさまよって、様々な本を貪り読んでいるうちに、師は自然と麻原尊師の存在を知るようになった。

「これは、何かが違う。」

心の奥底でそう感じ取った師は、取りあえず麻原尊師のプログラムに沿って、本を見ながら独自に修行を始めることにした。ただ、一人でやっていけばいいだろうと考え、オウム真理教に入信するつもりは全くなかった。

しかし、その後『トワイライトゾーン』という雑誌に掲載された尊師の記事が、そのような師の心に新たな衝撃を与えた。というのも、そこで尊師は遠大なる「救済」の法を展開していたのである。エゴを増長させた人類の決定的破局、二十一世紀の到来を前にして人類が受けなければならない苦難のシナリオ……。麻原尊師は広大無辺な慈愛と哀れみの精神をもって、一つでも多くの魂をこの苦難から救済し、ひいてはすべての魂を、解脱という絶対的な至福の境地へ導かんと

されていたのである。
師はこの記事を読んで強く心を揺さぶられた。いや、真我（本当の自分）が感応したといった方がいいかもしれない。小さいころから、社会の矛盾を感じ続けてきた師にとって、麻原尊師の説かれることは痛いほどよくわかった。「何とかしなければ」――そういう思いにかられながらも、なす術もなく暗闇の中を手探りで進んでいた師に、今はっきりと自分の人生を捧げる道が示されたのである。それは約束されていた道だった。「救済」――それこそが、師の魂が追い求め続けてきた聖なる「願望」であったのだ。
「こうしてはいられない！」
いてもたってもいられなくなった師は、即座に入信を決意した。
そして、その晩のこと、師は不思議な体験をした。
「わたしがオウムに入信しようと決心した晩のことでした。わたしの夢の中に三人のチベット僧が現われ、わたしがその前に座ると同時に、わたしのアストラル

次元のクンダリニーが覚醒するという信じられないことが起こりました。」

そして正式に入信し、自宅での修行を開始した師は、その前生からの修行者としての資質の高さゆえに、目ざましい霊的・精神的進化を経験することになる。

◉進む霊的体験

八六年から八七年にかけては高校の夏休みや冬休みを利用して、師は、集中修行セミナーに欠かさず出席した。高校生であり、なおかつ麻原尊師から遠く離れた京都に在住していたという悪条件のもとにあった師にとっては、このセミナーは尊師の説法が直接聞けて、しかも尊師のシャクティーパット※を受けることができる唯一絶好の機会だった。そして、この集中修行の成果は実に驚くほどのスピードで現われ出した。

まず霊的な体験からいうならば、瞑想中に体がぼよぼよに膨らむ感覚、水の中

※高レベルの成就者が、霊的エネルギーの移入、霊的経験を授ける非常に高度なイニシエーション。

に溶け込むような感覚、ぐらぐらと地面が割れ、体がぐるぐると回転するような感覚、アージュニァー・チァクラの真ん中から、白銀光が射し込みものすごい悦（瞑想によって生じる喜悦）を感じるなどの豊富な体験をしていった。

さらに、ツァンダリーの瞑想を行なうことによる体験も、大変進んでいった。師は、このときのことを『イニシエーション』（オウム出版・麻原彰晃著）でこう語っている。

「わたしはこの瞑想に入ると、自然にエネルギーが循環します。そして、しばらくすると、すべてのプロセスを光として感じることができます。クンダリニーがとても微細に、縦に振動しながら上昇し、サハスラーラ・チァクラに当たると、そこにジワーと歓喜が広がり、スースーしてきます。すると、わたしの外枠を甘露が下降し、それが終わると、ヴィシュッダ・チァクラに落ちます。すると赤紫の綺麗な光が立ち昇り、わたしはその光に溶けこみます。そしてアナハタ・チァ

クラを通過するとき、青緑の光が横に広がります。そして、マニプーラ・チァクラに達するころには、もうわたしは光の色がわからなくなります。
そして、スヴァディスターナ・チァクラに入ると、そこで円心状の歓喜を感じ、またクンダリニーが上昇します。このプロセスを繰り返すと、わたしの中にとてつもなく大きな広がりを感じます。」

ツァンダリーの瞑想によって得られたものは内的な神秘体験だけではなかった。なんと「空中浮揚」が可能になったのである。

「このツァンダリーを続けたところ、空中浮揚ができるようになったのです。気が吹き上がると身体がフワッと浮き、そのまましばらく静止します。そして、ドスンッと床に落ちるのです。空中浮揚については、特別の感慨はなく、ごく当たり前の現象として受け止めることができました。」

◉悟りへの一歩

さらに、このような霊的体験だけではなく、精神的なプロセスもみるみるうちに進んでいった。深い意識に入ることによって、それまで抱き続けていた人生や世の中に対する疑問や矛盾が増幅して感じられるようになったのである。

「心に落ち着きがなくなっていきました。ものすごい無常感に包まれ、どうしようもなく悲しくなったり、わたしの奥深く隠れていた、精神的な欲求が表面化し、わたしはいつも矛盾だらけの中にいました。……そのうちわたしのうちに、ある種の悲しみが生まれました。世の中に対する悲しみといったらよいでしょうか、いつも、これでいいのか、これでいいのか、と自問自答していました。」

しかし、そのような心境も、ある日を境にして突如劇的な変化を遂げた。それは一種の「悟り」とも呼ぶべきものであった。

「言葉では表現できませんが、わたしの中に、色もなく、言葉もなく、ただ大きな存在を覚えました。そのとき、知りました。わたしは、今まで、何も苦しむ必要がなかったことを。自分でつくり出した幻影に対して、愛着するから苦しみの中へ入ってしまうと感じました。」

麻原尊師は「自己の苦しみは自己の因」とおっしゃっているが、まさに師も、この真理を確実に会得しつつあったのだった。

時折セミナーに出席してはいたものの、基本的に自宅におけるたった一人の修行に励んでいただけの師に、このような飛躍的な霊的・精神的進歩をもたらしたものは、その修行者としての恵まれた天性だけでなく、修行に対する人並外れた意欲と努力であった。なんと一日五時間を修行に当てていたのである。当時の麻原尊師は、師のことをこうおっしゃっている。

「彼はまるで修行をするために生まれてきたような人で、すごいスピードで修行

が進んでいる。わたしのそばにいて修行が進むのは当たり前だが、京都にいるのでテキストに沿っての独習なのだ。セミナー以外は会う機会もない。それでこれだけ進歩が速いのは、彼が必死に努力しているからだろう。」

◉出家

このようにして、集中セミナーに出席しながら地道な自宅修行を継続していた師ではあったが、やはり出家に対する希望は徐々に抑え難いものとなっていった。とにかく「尊師のもとで修行を進めたい」、そう熱烈に望んでいた。

しかし——。即座に高校を中退して、出家したいという師の申し出を、父親は頑として拒絶した。師の大学進学を強く望んでいたからである。それなら——と、大学進学が家を出る条件であると心得た師は、東京の某大学を受験し、楽々合格を果たした。あまり勉強していなかったのにもかかわらずである。

なぜならば、勉強に関しては、師はほとんど苦労することがなかったのである。

というのも、修行によって得た鋭い直感力によって、試験で出題される範囲を事前に予知する能力を身につけていたのである。例えば、休み時間に偶然開いた教科書の箇所から実際に出題されたり——というように。

こうして、師はようやく家を出ることができたのだった。そして、ほどなくして家族を説得して、大学を中退し、念願の出家を果たしたのである。

◉極厳修行へ——

師は出家してから、まず東京本部道場でインストラクターとしてのワークにつくことになった（これから以下は、師にインタビューで直接語っていただいたので、その言葉をそのまま引用していくことにしよう）。

「まずはワークで徹底的に心を征服しようと、そう思ってました。それまでずっと、神秘体験よりも心のプロセスを重視しろと言われてきましたから、煩悩（ぼんのう）が満

たせる状態にいながらもそれを満たさないこと、それがそばにあっても全く平気な状態になること、それを願ってました。
東京でワークをし始めてからは、プライド崩しの連続でしたね。全く関係のないところで一つ一つ引っかかりをつぶしていくというような感じでした。」

※霊的プロセスに併せて心の成熟も進めていった師は、八九年十一月十日の夕方に、いよいよクンダリニー・ヨーガ成就へ向けての極厳修行に入ることになった。

「次の日に尊師がいらして、
『お前は二週間で成就しなければ東京に送り返す。』
と言われたんですね。そのときにもう観念しまして、何も考えずにとにかく与えられたことだけをやろうと。成就できるできないはカルマの問題であると。だから与えられたことだけをやろう、自分が尊師に教わったことをこなせば成就は必

ず与えられると信じてやりました。」

◉人の真価が問われるのは……

※修行に入って三日目、潜在意識にあった煩悩が一気に表面化し、ろれつが回らなくなり、身体中が痛み出した。食欲、性欲、情……これまで蓄積していた自己のカルマが立位礼拝という修行によって清算され始めたのだった。

「このときは本当に限界を感じましたね、苦しくて苦しくてしょうがなかったんです。それでそのときにふと思ったんですが、わたしは今まで自己の限界に挑戦したことが果たしてあっただろうかと。本当はなかったんじゃないかと。それならまず限界まで挑戦しようと考えました。

そして、人の真価が問われるときは、自己が極限にまで追い込まれたときにどう行動できるかにかかってくると。自己の煩悩とグルの意思の間にあってどう判

断できるかですね。そして、わたしは今修行をしているんだ、苦しいのを放っておいてまずは修行しよう、グルの意思を実践しよう、そう思って修行しました。その苦しみは四日目が最高潮でしたね。」

◉濁った心、わたしは無智だ

※行による苦しみ、煩悩による苦しみ、そしてそれを乗り越えて修行に打ち込もうとする師の意志の背景には、「わたしは無智である、それゆえにわたしは修行するのだ」という一つの「悟り」があった。この「無智」ということの自覚、それが師のあくなき修行の原動力となっていった。

「修行で限界を感じたときに思ったのは、わたしは無智であるがゆえに修行するしかないんだということでした。そして苦しいときはこれをまず念じました。

つまり、自分というのは生まれてからこのかた様々な経験をし、その経験をベー

スとして観念というものをつくってきたんだと。しかしこういった観念によって物事を考えることは決して正しくない。なぜなら観念がつくられたときに、わたしは愛著（あいじゃく）・邪悪心（じゃあくしん）・迷妄（めいもう）を持っていたのだから、その観念も、それによって考えたことも、当然正しくない。ここでわたしは無智であるということを自覚するわけです。

じゃあ自覚してどうするかと。自分は無智であり心が濁っている、透明な状態がわからない。しかしグルという最も透明な人がいる、グルのおっしゃることを実践することは、自分の濁った心を直すことであると。つまりグルの意思を実践することが、自分を幸福にすることであり、他の人をも幸福にすることであると、そう思ったんですね。」

――それが師の一つの「悟り」だったんですか？

「そうです。しかしこれは急にじゃなくて、東京でコースの指導をやってたころから考えていたことなんです。

そして、修行中に尊師のアドバイスがたくさんありましたね。その中でクンダリニー・ヨーガというのは心に浮いてくることを放っておくのが一番いいと、そしてとにかくツァンダリーをすること、回すことだと言われました。そして、限界というのは挑戦し続ければ必ず超えられると。

それを信じ、常にグルを意識してやりましたね。グルに教わったことに集中したならば煩悩は出てこない、集中していないから煩悩が出てくる。そして出てきたときにこそ集中するならば、煩悩は吹っ飛ぶと。そして修行を進めていくうちに、煩悩というのはデータですから消えていきますね。なぜならカルマというのは、三つの気管とチァクラにたまっているんだから、ツァンダリーをしていくうちにそれらは取れて消えていくんだと。

そして尊師のおっしゃった、自己の煩悩、自己の雑念に打ち勝ったとき成就は訪れるということ、それを信じて、それを根本にしてわたしは修行をしました。苦しくても、尊師が必ず超えられるとおっしゃっているんですから。だからもう

本当に修行の根本にあるのは、尊師の言われることを信じるか信じないかでしょうね。そして『信』を持ってそれを実践する――『帰依』ですね。わたしは帰依がないと思ってましたから、今こそ帰依の表現として一生懸命修行し成就しようと思っていたんです。」

◉クンダリニー・ヨーガ成就！

※修行に入って一週間が過ぎたとき、全身全霊で修行に打ち込んでいた師に「あとはひたすら瞑想」との指示が下った。真っ暗な部屋での二十四時間の瞑想、そして残りあと一週間というプレッシャーもかかり、師の修行はますます熱が入っていった。そして三日目、ついに「光の体験」をすることになる。

「他の六人の人たちと一緒に小さな部屋に移り、修行もただひたすらツァンダリーの瞑想になったんです。しかし一日経っても何も経験しない、二日経っても同じ

という感じでしたね。
そして成就した日、わたしが見た光というのはちょっと変わっていたんですが、高いところから降り注いでくるという感じで、すごく明るい光を見たんです。蛍光灯がつり下がっているような感じで。そして一瞬バッ、バッ、バッと光って、その時間は短かったんです。
その後尊師が来られて、そしてこのときの状態を言われたのだと思いますが、ふと、
『クンダリニー・ヨーガが終わるな。』
とおっしゃたんです。
そして、その晩に五分間のエネルギー移入を受けました。このときにわたしはあつかましいんですけど、尊師に、
『今、わたしは尊師のエネルギーが必要です。どんどんエネルギーを入れてください。もっともっと強く入れてください。今それが必要なんです。』

と。そして、

『その代わり、尊師から与えられたエネルギーは、必ず他の人に還元します。』

と請願したんですね。

そのときは何も感じなかったんですが、その後の瞑想はすごかったですね。マニプーラ・チァクラからエネルギーが上昇して、ものすごく明るくて、そしてそれが持続するんです。チカチカチカーッとフラッシュのような感じで、そしてバーッと光が降りてくると。

その後にマハー・ケイマ正大師が来られて、

「あとツァンダリーを三十回したら修行しなくていいですよ。」

と。それを二十二日の晩に言われて、二十三日の朝に終えました。成就確定と言われたのは夕方でした。

※それは十二日間という大変なスピード成就だった。二週間という期限を守り、

※意識が高い世界へ移り変わること。

グルの意思を形として表わした師。そして尊師からアーナンダ（釈迦十大弟子の一人。多聞第一と称される人物）のホーリー・ネームをこの時授かった。

◉冴え渡る瞑想体験

※成就した後も、怠ることなく師はさらに修行を続けていった。すると、瞑想体験もさらに深まりを見せ、精神性も高まっていった。師は、成就後どのような体験をしているのだろうか。成就後の変化について聞いてみた。

「クンダリニー・ヨーガの成就者は、エネルギーを周りに振りまくことによって、相手を引き上げるという働きがあると思うんですけど、結局その功徳によって、自分が瞑想に入ったときに意識が引き上げられるわけです。

どういった経験があるかというと、例えばポア※の経験があります。それは、例えば蓮華座を組むと風が上昇すると。風が上昇すると必ずナーディー、つまりエ

ネルギー管が詰まると。詰まるとそこのエレメントの光がアージュニァー・チァクラの上に光ると。そして、その光に対して綜制を加えます。その綜制というのは、まずは基本的にマントラの綜制を加えます。例えば、『欲如意足』とか、あるいはそこの詞章などを使って綜制を加えるわけです。すると、そこの結節の詰まりがある一定の段階まで来ると、瞬間的に抜けるんですね、スッと。その抜けると同時にアージュニァー・チァクラに映っている光の色が変わるんですね。

例えば、動物と人間の状態から人間・意識堕落天（阿修羅）の状態になって、そして意識堕落天・戯れ堕落天の状態にパッパパッパッと光が移り変わっていくのと同時に、ナーディーの詰まりもパッパパッパッと変わっていきます。

だから瞬間的には煩悩は滅せないけども、ある程度集中して思索を加えると、やっぱり意識がポアするなと。つまり、ナーディーの詰まりが瞬間的に取れるなと。それによって意識がチェンジするなと。あ、このようにして煩悩は消えていくんだなという経験をします。

その経験によって確信したことというのは、必ず相手を引き上げた功徳によって自分も引き上げられると。これはまず第一。第二番目に、その精神集中力、教義にのっとって思索を加えることによって、必ずどんな煩悩も止滅するんだなということ。第三番目に、自分では理解できないような煩悩の引っかかりが、グルの神秘的なアドバイスによって、調節できるんだなということです。

だから、わたしたちが本当の意味での煩悩を滅尽するためには、まず麻原尊師のような偉大なグルに巡り合うこと、そして第二番目にそのグルの教えにのっとって考えること、第三番目に実践すること以外ないという確認を得たというか、そういった経験をしましたね。

これらはみんな仏典に記載されている体験なわけですけれど、他に仏典にのっとった瞑想体験としては、第一天界、第二天界、あるいは意識堕落天の変化身の経験が大変多いです。

例えば、蓮華座を組んでアストラル・トリップをしたと。頭頂から抜け出して

いくと雲を突き抜けると。雲を突き抜けるとそこに鳥居がありました。この鳥居っていうのは第一天界の入口なんですね。そして、その鳥居を突き抜けると宮殿があって、その宮殿を越えるとスメール山に行き着くと。そういった体験をしました。

わたしは小さいころから、神社っていうのは不思議な形をしてるなってよく思っていたんですけども、そうしてアストラル世界に飛んで鳥居を見たときに、初めて昔の人が『神の社』って書いた意味がわかりました。うまい具合に書いたなと、神社ってあるんやなと、そういうことを再認識したっていう経験がありますね。」

◉現われる数々の神通力

※もともと「天才」と称えられるほど素質に恵まれていた師は、成就前から数々の神通を発揮していたが、成就後はますますそれに磨きがかかった。

超能力少年——こう呼ぶのはあまりにも軽すぎるが、一般の人間が師を評する

となるとこうなるのではないだろうか。そう思えるほど、師の神通力のエンピソードは数多い。成就後の体験の中で主なものを語っていただいた。

「わたしの場合は、これは現世において修行を積み重ねた結果でもあると思うんですけれども、人の心を透視するのがある程度得意になりました。

例えば、それは目を開けて話している間においても、相手の心が様々な光で見えるんです。例えば情を持ってる人はブルーがチカチカするとか、あるいは悪業の多い人には黒いドットが見えるとか、あるいは功徳のある人は白い光が見えるとか、あるいは貪りのある人はどす黒い黄色が見えるとか、といった形で、俗にいわれているバルドーの光に近い光というものが頻繁に見えるようになったということです。

これは、一人二人の例じゃありません。わたしの場合は毎日平均的に非信徒さん三名四名と会っています。つまり、毎日毎日それを一年間続けてきたわけで、

単純に計算したとしても、千人あるいは二千人近くの非信徒さんと会ってきたわけですが、それに応じて、すべてにおいてその力を生かせるというか、それで失敗することはほとんどありませんでした。

特に、相手が知らないような心の引っかかりを、その光によって相手に告げてあげることによって、相手が自分の深層心理を理解し、そこでオウム真理教の教義に対して信を深めるといった例が大変多くありました。

例えば、非常にプライドの高い人の場合は、自分の心の弱さを隠すわけですが、その心の光は隠せないわけですね。そこで、わたしはその心の光をズバリと読んで、あなたにはこういった心の光が見える、だからあなたはこういった要素で今の心の状態を覆い隠しているけど、実はほんとはすごく心においてこのような引っかかりがあるから苦しんでいるんだと指摘するわけです。」

——このようなことがあった。

ある女性のサマナが人間界の煩悩が強いゆえに、還俗(げんぞく)してしまった。そして、アーナンダ師は、還俗した直後に彼女と会った。

このとき、アーナンダ師が透視した彼女のバルドーの色は、グリーン、ブルー、赤であった。これは、動物、人間、意識堕落天を現わす色である。

「あなたは、グリーン、ブルー、赤の光を見ませんか。」

「見ます。そのとおりです。」

彼女は、驚いてそう答えた。

二、三カ月後、再び、アーナンダ師は彼女と会った。

……グリーン、どんよりとした黄色……今度はブルーがほとんど見えなかった。グリーンは動物の色。黄色は、低級霊域、いわゆる餓鬼の色である。

「あなたには、今動物の色と餓鬼の色が見える。無智に流された貪りの強い生活をしているんじゃないですか。」

「……そのとおりです。」

そして、またその後。

「うん？　猫が見える。」

彼女と相対したアーナンダ師は、シマ猫のヴィジョンを見た。

「わたしには、今シマ猫のイメージやヴィジョンがたくさん見えるんだけれども、今実際こういう夢はたくさん見てませんか。」

こう問うたアーアンダ師に彼女は告白した。実は、彼女は、自分が大きいシマ猫に変貌したヴィジョンを見ていたのである。

「これは、何を意味しているかといえば、透視によって、相手が見ていることと同じ状態を見極め、それを知ることができると。その経験によって得たものというのは、仏典に記されているように、下向していく道は一本であり、上昇していく道は一本であるという事実の再確認です。

つまり人間というのは、瞬間的に落ちるんじゃなくて、意識堕落天から人間、

餓鬼、動物という具合に順々に落ちていくわけです。その落ちるプロセスに従って彼女が落ちていった現象界の状態と、そして彼女の発する心の光は全く同じであったと。これはまさしく、教義にのっとった形において、人間は下向していくんだなということがよくわかりました。

反対に成就していく人たちを見ると、やっぱりすごく光っているんですね。この光があるというのはそれは功徳があって、功徳を漏らしていない状態だということなんです。すごく光が強くなって、上に引き上げられるエネルギーが感じられる人がときどきいるんですが、そういった人たちはやはり成就していっています。すべては経典のとおりに現象が動いているなということを感じました。」

——透視で見えるというふうにおっしゃいますけど、実際にはどんな感じで見えるんですか?

「いくつかのタイプがあるんですが、目をつむるとアージュニァー・チァクラの上に、その光がもわもわもわっとたくさん重なって見えるというか、例えばあま

り調子が悪いときは、わたしは暗性なのでヴィジョンは暗いんだけども、その暗い中に光が重層に重なって見えるんです。例えば黒の上に赤が乗っかって、赤の上にブルーが乗っかっているとか。それはつまり、無明があって、その無明の中に今度は意識堕落天の要素があって、そしてその上に人間的要素である情があるということを意味しているわけです。

目をつむった状態で、あるいは目を開けてる最中に、その相手の心が変わった瞬間に、光のドットが光って見えるということもあります。

わたしはクンダリニー・ヨーガを成就して一番欲しいなと思っていた力というのは、このような透視能力なんですね。というのも、『どうしたら相手の苦しみが理解できるんだろう』と、特に『相手の苦しみを理解できて、どうすれば相手の苦しみを教義にのっとって滅することができるんだろう』ということしか考えてなかったんです。だから結局、そういった力が少し増大したんじゃないかなと思います。

逆にいえば、成就する前というのは空中浮揚というのをバンバンしてたんですけども、今はあまりほとんどしていません、エネルギーをロスしてますから。それで肉体的には神通力とかはあまりないという感じですね。」

◉神々の声を聞く天耳通

※このような神通力の他に、師は最近、天耳通（てんにつう）も体得しているという。

「最近、天耳通らしきものが生じてきているみたいで、非信徒さんに話をしているときに、神々の声かどうかはわからないんだけれども、耳元で声が聞こえて、『この人はこういった要素を持っている』というふうに言ってくるんです。そして、それをそのまま伝えると、本当にそのような心を持っているということがあるわけです。

あるいは、話をしているときというのは、タイミングというのがありますよね。

こっちの主張をスパッと言うタイミングがあるんですけども、特に相手の心を見つめようとしてタイミングを取ろうとするときに、『いや、今ここで相手の話を聞くと相手のペースにはまるから、絶対に相手の話を聞いてはいけない。今はグルの教えというものを述べる時期である』と、ボーンと聞こえてくるんですね。で、それを言うとうまいことになって、その指示に従わないと結局失敗してしまうというわけです。

結局、わたし自身は最近感じているんですが、こういう神通力は自分の力ではなくて、あくまでも救済というものを意識したときに、グルの変化身というか、麻原尊師と一体化することによって、そういった力を借りているだけだなという感じがしますね。」

◉カルマを超えて

※そうした神通力を身につけていくにつれて、師の心の成熟もどんどんと進んで

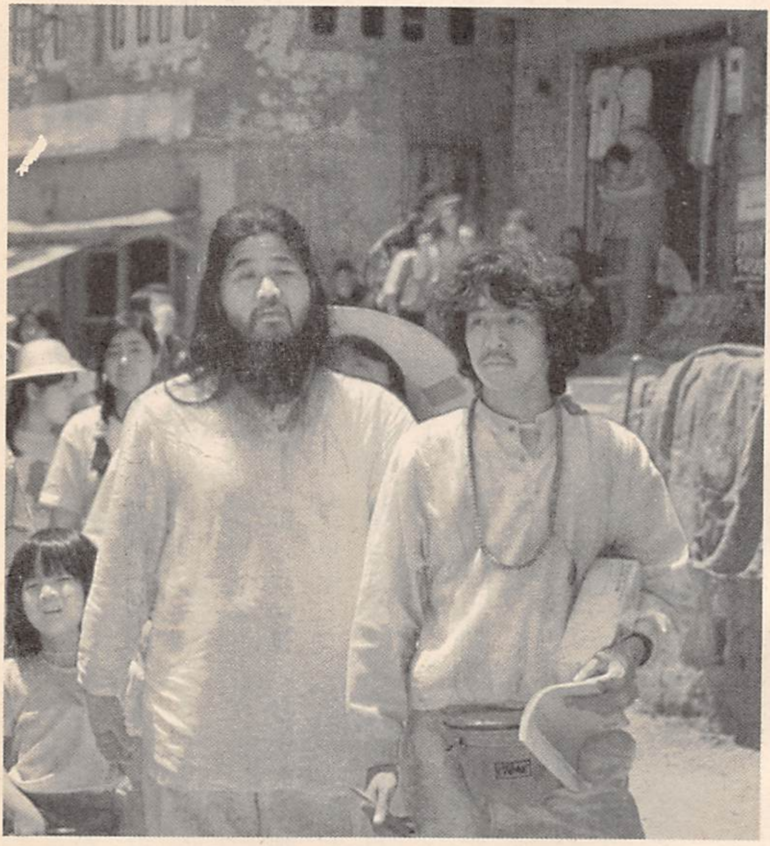
いった。

「成就後に得た最高の利益とは?」――この質問に対して、師は「カルマの法則を認識できるようになったこと」と語る。善行であれ、悪行であれ、なしたことは必ず自分の身に返ってくるという「カルマの法則」。師は最近になってこのカルマの法則の存在と、それを超越していくことの必要性をあらためて痛感しているという。

「成就してから三年経った目で過去を振り返ってみると、やっとようやく今になってカルマの法則が目に見えてきてきつつあるなという感じなんですよ。

というのは、わたしたちは麻原尊師の本を読めば、カルマの法則ってあるんやと、なすことは返ってくるんやという感じで漠然と思うんですけども、思うからといってそれに対する恐怖とか、それに対しての思索というのはなさないわけですね。わたしの場合もそうだったんですよ。

帰依の心がもたらした智慧、そして神通力



今になってやっと、その日々の自分のカルマがいったい次に何を生むかということをしっかり理解して、そして、できるだけ将来の苦しみとなるような原因を今の段階において断つための思索ができるようになったこと、これはわたしにとっての今までの最高の利益じゃないかなという気がするんです。

というのは、われわれというのはカルマの法則が目に見えないから、何気なく話すこと、何気なく行為すること、何気なし心に思索したことが未来を自然につくり替えてしまって、結局そのカルマの法則に流されてしまって、自分自身がどうしようもない状態になってしまっているわけです。

これは絶対的な不自由だと思うんです。絶対的な不自由というのは、そのカルマの法則という絶対的な法則によって自由を奪われている。そのカルマを知り、そのカルマをコントロールするということは、これは絶対的な自由じゃないかと思うんです。そういった意味においてのカルマの法則にのっとって、今がんじがらめになっている我々のカルマを見据えて、それを一本一本切っていく作業をやっ

と始めることができたという感じがしますね。

成就した当初というのは、そうじゃなくて、エネルギーでバーンと上がって、とにかく何をしなくてもエネルギー的には喜悦であると。しかし、カルマの法則を知り尽くしているわけではないので、カルマの法則をしっかり認識した上において思索を加えるわけにもいかないし、相手のカルマを読むこともなかなかできません。

ただ、成就した段階において、人間の意識状態よりもはるかに素晴らしい意識状態を経験していますから、人間の意識状態を羈絆（きはん）している日々のカルマの法則に対して不自由だと思い始めるわけですね。だから、そうして自分が経験した喜悦の状態を、どのようにすれば保てるかというふうに考えるようになります。

そして、この段階において、クンダリニー・ヨーガの成就者というのは多くの非信徒さんとか、多くの人たちの苦しみを見て聞いて感じることができます。それによって自分の一生だけではできないような経験を内側に包含することができ

ます。

その包含というのは、いろんな人たちに会うことによって、その人たちの一つ一つの心の働き、その心の働きから生じるエネルギー、そのエネルギーから発する心の光を分析し、実際の言葉や行動と照らし合わせることによって、自分のカルマに対する見方というのが鋭くなってくるということです。

それをひたすら積み重ねることによって、少しずつ少しずつ自分の本質的なカルマというものを切っていくことができるようになるわけです。

まあ、単純にいえば成就して、一生懸命その成就の状態をキープしようとすることによって、カルマの法則が見え始めると。そしてその状態というのは決して満足できる状態ではなくて、もっともっと素晴らしい境地があるんだということを認識したときに、初めて傲慢(ごうまん)さというのが捨てられるようになってきて、もっともっとカルマに対してしっかりと認識して、それを超えることができるようになるのではないかと思います。」

◉煩悩滅尽の素晴らしさ

※オウム真理教の修行者が目指している煩悩滅尽の境地「解脱」。その意義と素晴らしさは、煩悩を満たすことを喜びと考える一般の方にはちょっとわかりにくいようなのだが、ここでその素晴らしさについて、師にわかりやすく語っていただいた。

「簡単にいえば、わたしたちは絶えず幸福になりたいと思って、何かしらの欲求を、形あるものの欲求をしてるわけですよね。そこで形ある欲求をすることによって、必ず心に緊張が生じます。

例えばその緊張を具体的に言い表わせば、自己を保全したいという欲求を持てば、嫌悪という心の働きが生起します。嫌悪という心の働きが生起することによって嫌悪に満ちた言葉が発せられます。そして、嫌悪するような行為をなすことになります。

そうして嫌悪することによって、相手もその心の中に嫌悪とかあるいは排斥の念を持ちます。相手が排斥の念を持つことによって、自分自身も未来において排斥されるんじゃないかという心の不安というか、心の緊張が生じます。そして、わたしたちは本当は心を最もリラックスさせたいんだけども、その間違った煩悩によって自ら心に緊張を持ち、そこで苦しんでいるわけです。

それは、貪るということも同じです。例えば物を持ちたいという欲求によってそれを持つことができるかもしれないけれど、今度それを失うんじゃないかという心の緊張が生じます。その緊張によって、心の焦りとか、焦燥感とか、退廃感とか、諸々の苦しみというのを内側に蓄積していくわけですよね。

しかし成就というものは、そういったものを一つ一つ解き明かしていくというか、その心の緊張を一つ一つ取っていくものだから、いかなる状態においても心に緊張が生じない状態、しかもリラックスするという状態が生じます。これこそ情報に流されずに、全く心が緊張から解き放たれた状態なんです。これはまさし

くカルマを知り、カルマを超え、煩悩を滅尽する本当の意味においての心の喜びじゃないかという気がしますね。

結局、煩悩を持つことによって、わたしたちは苦しみの原因である緊張や、あるいは心の何かしらの陰りっていうのを残さないといけないわけです。その念というのは、必ず現世における幸福にはつきまとうんですが、そういったものを超えた広大無辺な意識状態を成就によって経験できると。成就というかカルマを超えることによって経験できるというわけですね。」

◉自己を犠牲にして、他に尽くすこと

※最後に、師は今後の抱負を次のように述べてくださった。

「とにかく最終解脱するまでは自分は無智なんだ、修行するしかないということですね。そして自己の身体を犠牲にし、他に尽くすと。このときにエネルギーを

ロスする、煩悩を背負う、この修行は絶対必要だと思っています。
たとえそうやってエネルギーをロスしても、グルを意識する瞑想をすることによってエネルギーは回復します。瞬間的にパワーを取り戻すということです。だから、すべては心の働きによってエネルギーが支配されていて、その心の働きをある程度コントロールできるようになることによって、いかなるときにおいても自分が持っている力以上の力を発揮することができつつあるという感じがしますね。
これからは、次のマハー・ムドラーの成就に向けて冷静さと分析能力、これをつけていきたいです。そして、すべてのものの背景にはグルがあるんだということ、わたしがここにあるのもすべてはグルによるんだということ、それを常に思ってグルの意思を実践する、それが課題だと思っています。」

◉聖なる「願望」——すべての魂のために

師の言葉のあちこちに登場してきた「グルに対する信と帰依」そして「グルの意思の実践」という力のこもった言葉。これは、グル麻原尊師の意思——すべての魂を煩悩によって生じる苦悩から解放し、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の境地へと導いていく——その実践のために、師が自己の心身の犠牲を顧みず、全身全霊をなげうっていることを示すものである。

師の周囲の者はよく知っている。師がその言葉に違わず、ほとんど休む時間を持たず、横になることすらなく、だれよりも熱意を込めて、二十四時間にわたる超人的な救済活動に邁進しているということを。

どうすれば他の苦しみを理解してあげられるんだろう、どうすれば他の苦しみを取り去ることができるんだろう、ただそれだけを考えつつ修行を進め、驚異的な神通を身につけてきた師。師にとっては、苦しみ悩む魂がたった一つでも存在している限り、その救済の歩みを止めるわけにはいかない。

「すべての魂の幸福のために」——この願いこそが、金と欲の渦巻く現世の中で苦悩してきた師が到達した、真に意味のある、信に価値のある、聖なる「願望」に他ならないのである。

原宿デザイナーから聖者へ

◉自分を乗り越えて

ヘアーは流行のボブカット、ロングの黒コートに身を包み、サムタイム片手にウオッカをすする。夜明けまでボーイフレンドと飲み明かし、麻布十番にある自宅に朝帰りの毎日。そんな原宿勤めのバリバリのデザイナーが、オウム真理教に出家し、解脱をした。今、彼女は、不飲酒、禁欲などを含めた戒律を厳格に守り、清浄な生活を送りながら、人々に真理の法を説いている。

自堕落な生活から、聖者へ——。自分という壁を超え、人間を超えたマチク・ラプドンマ師（本名　宮本公恵　三十一歳）の例は、修行というものが確実に人間を進化させるものであることを証明するよいケースであるといえよう。

◉無関心だったわたしの方が先に入信して……

わたしは小さいころからリアルな夢を見ることが多かったので、何か別の世界に対するあこがれがすごく強かったんです。しかも、思春期には多くの神秘体験



をするようになっていましたから、不思議なものに対する関心が普通の人よりあったんだと思います。そのうちに精神世界の本を自然に読むようになって、このころから、だれかについて修行をしなければならないと思うようになっていったんですね。

そうしたら、ちょうど日本に尊師のような方がいると知ったんです。最初は、同居していた彼が尊師の著書である『超能力・秘密の開発法』（オウム出版）を買ってきて、テーブルの上に置いていたんですよ。わたしは、尊師が空中浮揚をしているその写真を見て、「浮いたってしょうがないじゃない」と言っていたんですね。でも、そんなわたしが彼より先に入信してしまったという（笑）。読み始めたら一気に読んでしまって、これは本物だという直感があったんですね。

本を手にしたのが八六年の七月で、入信したのが八月でした。

◉現われる前生からの素質

※煩悩(ぼんのう)渦巻く社会環境に流されて、入信前自堕落ともいえる生活に陥っていたマチク師であったが、前生では優れた修行者であったため、入信して即修行の効果は現われた。修行の一段階である表層意識と潜在意識の交錯するプロセスも早い時期に経験している。

入信した当時は、自分の表層意識と潜在意識が交錯して、自分が自分でないように思ったこともありました。

初めてオウム真理教のセミナーに参加したときにも、すごく感動して、「やっとこれで、わたしの探し求めているものが見つかった。これでもう、わたしの心はさまようことはないんだ。」と、いつも思っている意識とは、別のところからそういう思いが込み上げてきて。

でもその後に、いつもの意識で、

「何でこんなこと思っちゃったんだろう。わたし、別に何にも探してなかったのに。」

と不思議に思っていたこともありましたね。

そのころは、どうしてオウムにこんなにひかれたかわからなかったので、ほとんど分裂症みたいになっていたんですよ。この現実世界が楽しくて、いつも遊んで、洋服をいっぱい買い込んで、楽しんでいる自分と、それを本当にばかばかしいと思っている自分とが、完全に分裂していて。

そのころ親しかった人にいわせると、わたしといると、全然別の性格の二人の人間と話しているような気がするって言われていたくらいでした。タバコもお酒もピタッとやめられたのも、このころでしたね。

※オウム真理教の活動を続けていくにつれ、マチク師は、精神の分裂状態もなくなり、心も安定し、落ち着きが出てきたという。そして、道を求めていた彼に引っ

張られて、二人で出家することとなったのである。

出家とは、現世的な今までの自分と別れを告げ、一生涯、真理の道に自分を捧げることを意味する。しかし、マチク師は、現世的な煩悩を引きずったまま出家したため、ここから苦悩がスタートするのである。

◉うれしそうな顔をした変化身が出てきて

最初は今みたいに戒律も厳しくなかったので、出家したころというのは楽しかったですね。何か大家族のところに引っ越してきたという感覚しかなかったし。まあ、今思うと本当に甘かったんですけども。

神秘体験は豊富でした。このころの体験は『イニシエーション』(麻原彰晃著・オウム出版)に詳しく書いてありますけれども、印象に残っているものとしては、変化身(へんげしん)の体験がありました。

みんながセミナーに行ったときのことなんですけれど、わたしは仕事があった

から、セミナーに行けなかったんですね。そのときに、ウトウトしていたら、急に金縛りが起こったんです。すると、マニプーラ・チァクラのあたりから、白いモヤモヤッとしたもう一人のわたしが出てきたんです。「やっと出ることができた」というような、うれしそうな顔をして出てきて（笑）。これはわたしの変化身だそうなんですが、そう思った瞬間に今度はその変化身の意識に移って、ものすごい勢いで上昇していって、息が止まるかと思うくらいの経験をしましたね。

そのときに、過去世が見たいと思ったら、パッとヴィジョンが変わって、どこかの山でわたしが尊師の後ろを歩いているのが見えてきました。そこで尊師に、「これがニンマ派の人たちだ」と修行者を紹介されたヴィジョンを見ていました。もっと続きを見たかったんですけれども、夕方、仕事中に仮眠を取っていたので、仲間が「起こせ」と言っているのが聞こえてくるんですね。肉体の意識と、変化身の意識と両方の意識があるという状態でした。それで、仕方がないなと思って、肉体の意識に戻ってきて、起こされる前に自ら起きてきたという体験をしまし

たね。

※マチク師は、今生メチャメチャな生活を行ない、カルマのけがれを作ってしまったが、前生では非常に瞑想ステージの高い修行者であった。そのため、今生でもアストラル世界において、大変高度な体験を経験している。これは、彼女がチベット密教のカギュ派で修行していたときの前生夢と、「夢見のヨーガ」といわれる瞑想体験である。そのステージの高さゆえ、出家してすぐに極厳修行の話も出た。

◉カルマの清算を受けよ！

このころの極厳修行は、真っ暗にした部屋の中で一人で修行するというものだったんですけれども、わたしは殺生のカルマがあったので、暗闇がとても苦手だったんです。だから、最初は、部屋も暗くなく、カーテンだけは閉めていました。

初めのうちは、変化身の体験をしたり、結構神秘体験をして面白かったんです

けれどもね。でも、十日目くらいに急に潜在意識が出てきてしまったんです。会いたい人が突然、ヴィジョンとしてパッと出てきたんですよ。そうしたら、ものすごい勢いで、「会いたい！」という感情がバーッと込み上げてきて、涙まで出てくるんですよ。本当に、このまま走り出して会いにいってしまいそうな強い気持ちだったんです。それまで適当に自分をごまかして生きてきましたから、そんなに強い気持ちが自分の中にあったということ自体にビックリしましたね。

そして、本当にタイミングがすごくいいんですよね、尊師って。その次の日に尊師から電話がかかってきて、「どうだ」と言われまして。状態を話すと、本格的な極厳修行にするということで、早速その夜に部屋を真っ暗にすることになってしまって……。

ショックでした。部屋に入れないくらい怖いんですよ。次の日の朝になって、修行をやろうとすると、ちょっとやっただけでできなくなってしまうんですね。怖くて、怖くて「助けて！」って叫びたくなるくらいでした。でも、なぜか逃げ

るわけにはいかないなという思いがあったので、必死に闘いました。

※迫り来る暗闇の恐怖——これはだれもが死後経験しなくてはならない死後のバルドー（中間状態）の体験である。特に今生殺生のカルマを犯した者は、そのカルマの清算として強い恐怖に襲われるのである。この恐怖と必死に闘ったマチク師であったが、一回目の極厳修行は結局失敗に終わってしまった。

その後、マチク師は二回目の極厳修行に挑戦する。このときは麻原尊師の導きにより、無事極厳修行を終えることができた。しかし、この極厳修行後、マチク師は大魔境に陥り、戒を犯してしまうこととなる。これは、彼女の根本的な心の引っかかりである寂しさなるがゆえの破戒であった。そして、三回目の極厳修行に入ることになるのである。

◉地獄――ごまかしようのないわたしの世界

このときの極厳修行の恐怖は言いようがないんですね。ひょっとしたら、無間地獄にまで落ちてしまったのではないかと思うくらいに真っ暗で。その密度の濃い暗闇が、わたしに向かって圧力をかけてくる、迫ってくるという感じで。何が恐いというのではなくて、ただ恐怖の中に落とされてしまった、恐怖に落ちたという印象ですね。

●四月二十八日

ゆうべは日記を書き終わり、夏からの日記を読み返していました。恐怖は何日目くらいから来たのだろうかと考えながら。やはりまだまだ恐れているのです。夏のときと同じ恐怖が襲ってきたときに、果たして耐えることができるのだろうかと。

そんなことを考えてしまったら、やはり体中がガタガタと震え出し、恐怖に襲

われてしまったのです。恐ろしくて横になっていることもできなくなり、毛布にくるまったまま、ひざを抱えて震えが治まるのを待ちました。未来際において、もう二度と同じ過ちを繰り返さないためには、もっともっと苦しまなければならない。こんな苦しみはまだまだ序の口だと考えながら……。

ここで逃げても、結局これは自分の持っているもの、この暗さというのは、明らかに自分の世界でしかないわけですからね。外に出ているときというのは、いろんなものでごまかしてしまいますよね。でも、そこの暗闇の世界はごまかしようのないわたしの世界ですから、例えばその苦しみから逃げたとしても、そのカルマを落としてしまわない限りは、いつかはその苦しみを味わうわけですよね。だから、それに気づいてしまった今は、耐えるしか抜け出す道はないんだと心に言い聞かせて、必死に闘いました。

そして、わたしの場合は座ることによって、恐怖を回避していました。常に緊

張状態を保っていたんです。だから、眠ることもできないし、食事も取れないんですよ。横になって気持ちがリラックスすると、すぐに恐怖に負けてしまいそうになってしまうから、座って緊張状態にして、その闇をできるだけ自分から離そうということをしていましたけれども。座ることしかできないという感じでしたね、それを脱出するためには。

とにかく恐怖を強く味わうほど、カルマは落ちていきます。座って恐怖と闘うこと自体がカルマ落としですからね。

◎手足をズタズタに切り裂いてしまいたい

●四月三十日

今日は、嵐のような日だった。

八時ごろから、また急に恐怖に襲われ、突然修行ができなくなった。十時になって、とうとう戸を開け、

「尊師に電話をかけたいので、ここを出たいんですが。」
と、お願いしてしまった。
「大師（たいし）に聞いてきます。」
と、K君が言って出ていくと、大師が「どうした」と言って顔をのぞかせた。
わたしは、
「もう怖くて修行ができなくて……。」
と言うと、泣いてしまった。ゆうべから泣き通しである。大師と少し話をして、一時になったら尊師に電話をかけてもらう約束をした。
わたしは本当に電話がかかってくるんだろうかと、不安でしょうがなかった。
午後になると、今日は晴天らしく、部屋が異常に暑い。暑さのせいで、呼吸もしづらく、いっそう恐怖心をあおりたてた。
いっときすると、また大師が来て、
「尊師から電話で、『恐怖が出てきているのはバルドーを体験しているからだ。

その原因と結果を考えろ』ということだ。尊師はちょっとインドへ行かれるから、もうここには来ないそうだ。大丈夫だよ。頑張れ。」
と言って出ていってしまった。
わたしの心臓は破裂しそうである。尊師が来てくださらないことについては、一瞬尊師の愛を感じたのだが、しかし、もうほとんど恐怖が限界に来ていたので、また泣きじゃくってしまった。
明かりをつけ、カバンの中をまさぐった。もし、カッターを持ってきていたら、それで手や足をズタズタに切って、カルマを落とそうと考えたから……。わたしにとって、この精神的な恐怖より、肉体的に痛めつけて、少しでもカルマを落とす方がはるかに楽だった。
しかし、カッターはなかった。絶望的な気持ちで泣きながら、明かりを消した。もう、気が狂いそうだった。
もう耐えるのはやめて、ここから出ていこうかとも思い、カバンに荷物をつめ

たが、しかし、行く所がない。出ていこうと思えば、出ていけるのだが、なぜかそんな気がしない。尊師のそばから離れて、いったいどこへ行けばいいのかわからなかった。どこにも尊師の代わりになる人なんていないのだから。

明かりを消した後、尊師に言われたとおりに、もう一度、原因と結果を考えてみようと思った。しかし、やはり頭はボーッとしているし、殺生したという以外に何に原因があるのだと思った。

頭の中でグルグル考えを巡らせていると、突然、「ああ、そうか、今まで楽しいと思って行なってきたことが、すべて苦だったんだ」と思い至った。その瞬間に、心が静まった。一時的なものではないかと思い、恐る恐る目を開けてみると、そこには、いつもよりも密度の濃い暗闇があった。「ああ、本当にバルドーの中にいるんだ」と直感したが、その暗闇を目を見開いて見ることができた。恐怖心が消えていた。

そこで、今まで、異性と付き合った経験を一つずつ考えてみることにした。す

べての因は苦だということがわかる。そして、もたらされた結果は、一見楽に見えるが、すべては次の苦の因にしかなっていないのもわかる。すべて、今までにないほど、明晰にものが見えた。

◉悲しみのバルドー

最初のうちは恐怖のバルドーに入っていたんですけれども、その恐怖が抜けたときに、今度はすごく幸せな時期があったんですよ。で、しばらくすると、また二回目のバルドーに入ったんです。今度は悲しみのバルドー、悲しみの世界だったんです。

●五月七日

今日はひどい雨だ。雨の音があまりにもうるさくて、周りの音が何も聞こえない。雨の音を聞いていると、いつも無性に寂しくなってしまう。なぜだろう。

自分の中にある寂しさに打ち勝つためには、いったいどうしたらいいのだろう。明日でないと尊師はインドから帰っていらっしゃらない。ここに寄ってくださるとしたら、それはあさってかもしれない。ただただ時間が過ぎるのを待つだけになってしまった。これはまるでわたしの幼いころのようだ。幼いころはカギッ子で、いつも独りだった。無口だったため、友達もあまりできず、大抵は家の中にカギをかけられ、閉じこもって一人で遊んでいた。そのときも、なぜか雨の日は本当に寂しかった。別に晴れているからといって、外に出て遊ぶわけでもなかったのに。

その寂しさをずうっと引きずって生きていたような気がする。

寂しいから友達が欲しい。寂しいから恋人が欲しい。そして、寂しさのために友達や恋人を作っても、何にもならなかった。ただ、自分をごまかしただけで、寂しいという感情は少しも消えない。友達や恋人を替えても同じことを繰り返すだけ。自分のための友達。自分のための恋人。そして、お互いに傷つけ合ってし

まうだけ。
欲求を消してしまうことができれば、楽なのに。欲求がなくなった状態、エゴがなくなった状態、これが解脱なのか……。だとしたら、まだまだ先は長い。
本当に寂しい、寂しい、寂しい。心が落ち着かない。今は、過去を思い出したくない。極厳修行に入ってから思い出す過去のわたしの記憶は、どれも暗くて汚いものにしか見えないから。わたし自身が汚いのだ。わたしの作った思い出なんて汚くて当然だ。
けれど、今は、未来にすら光が見えない。出口のない迷路の中で、いつまでもさまよい続けなければいけないのか。

※心の本質的な寂しさに到達し、悪戦苦闘しながらも修行を続けていたマチク師。その甲斐あってか、心は徐々に成熟し、一つの悟りが訪れる。

◉悟り——当たり前のことじゃない

その他のいろいろな煩悩については、無上ヨーガ、つまりツァンダリーの瞑想によって落としていきました。

また、自然にそうなってしまったんですけれども、ただその煩悩を見つめるというやり方も使いました。お腹がすいたなと思うと、ああお腹がすいているんだなと、ただそれだけ。固執しないというかね。

だから修行から出る直前っていうのは、食に関していえば、食べても食べなくても全然変わらない。食べる前も全然お腹はすかなかったし、食べてからも全然お腹が膨れたっていう感じはないし。

わたしの場合、怒りとか嫉妬が出てきたときは、その感情に没入しろって言われてました。そうやって没入していくと、そういう汚い自分にウンザリするんですよ。すごく怒っている汚い自分が嫌で、その嫌悪感によって怒りっていう感情はなくなっていきました。

一つ一つの悟りの瞬間は、やっぱりブッッていう感じで切れるんです。そして、しばらく時間が経つと、それがほんとに当たり前のことだったとしか思えなくなるんですよ。今までのわたしが、そういう当たり前のことにも気づかないくらいに、無智で愚かで汚い人間だったんですね。

◉わたしのすべてがグルとなることができたら……

※修行に入って百日近く経っても、まだマチク師は成就することができなかった。成就できない焦りと、修行の行き詰まりを感じていたころ、一つの大きな心の体験をすることになる。

●七月二十三日

ヴァヤヴィヤの時間になっても、やる気も起こらなかったが、無理にでもやり始めた。するとどうだろう。何息か行なっているうちに、この寂しさは、わたし

のものではないと直感し、その途端、笑いが込み上げてきてしまった。そして、殺生のカルマを作ってから、十年弱の間、心をけがし、腐らせてしまった自分に泣いた。

今、一番欲しいものは何かと考えてみると、それは、グルとシヴァ大神への百パーセントの帰依、完全な帰依が欲しいと思った。さっきまで、光が見たい、音楽が聞きたい、幽体離脱がしたいと思っていたことが、あまりにも次元が低く、バカバカしいことだと思った。そう思った途端に、透明で柔らかな、とても美しいブルーの光が見え始めた。その光は、いろんな形で輝いていた。白銀や白い光とも混ざり合い、本当に美しい光だった。だんだんブルーの光は大きく広がり、その周りで白い光の粒が無数に輝き、頭頂から白銀の光が降り注いでくる。それと同時に、とても柔らかい悦が生じてきた。

そして、独房にこもり始めたころに、わたしはグルの一部だと思ったことの意味が、今やっとわかった。尊師に初めて会ったときに、「わたしの探していたも

のがやっと見つかった。これでもうわたしの心がさまようようなことはない」と感じたところと同じところから来た思い。そう、それは左のアナハタの奥から聞こえた声、多分真我の叫びだったのだろう。

グルに帰依できたときに、初めてわたしたちはグルの分身となることができるのだ。そして、それがグルの一部になるということなのだろう。まだまだわたしは帰依が足りない。グルが注いでくれる愛に比べ、わたしの信や、帰依は比較にもならないくらい小さい。わたしのすべてがグルとなることができたら……。

◉三グナの霊視――黄金、白、ブルーの光

※そんな心の変化とともに、ようやくマチク師にも一つの成就が訪れた。ラージャ・ヨーガの成就である。ラージャ・ヨーガの成就は、わたしたちを迷妄の世界に巻き込んだエネルギー体、三グナを霊視することによって、もたらされるのだ。

ヴィジョンの中で、まず山吹色、光れば黄金色っていう色の、雪の結晶形をした丸い輪が風車みたいにクルクル回ってるんですね。わたしはそれをすぐ目の前で見ていました。周りには、ゴーっという音が聞こえていて、触ろうかなと思っても、そのヴィジョンの中ではわたしの肉体はなくて、意識だけがある状態だったんです。黄金色の向こうの方には白い輪が、さらにその向こうにブルーの輪があったんですね。

「何だかよくわからないなあ」と思っていたら、急にヴィジョンが変わって、その三つの輪をガラス越しに見ている状態になったんです。そして、そのガラスの横にデパートガールのような濃い青色の制服を着た女の人が立っていました。そのお姉さんは、肩の高さに手をかざして、

「これが三グナです。」

と解説してくださいました。わたしはといえば、「へー、あれが三グナか」と納得して見ていました。

尊師がいらっしゃったときに、

「三グナは見たか。」

と言われたので、こんなヴィジョンを見たんですよって申しましたところ、

「ウーン、それは三グナだな。」

と言われて驚いて（笑）。あのデパートガールのお姉さんは、わたしの守護神だったそうです。笑い話にしかならないような三グナの見方をしてしまいました。それが本当の三グナだと思いませんでしたね、さすがに。

◉人を超えて

※成就——それは人智を超えた神の叡智（えいち）を身につけることを指す。もともと神秘体験が豊富で、前生でも高いステージに達していたマチク師は、ラージャ・ヨーガの成就を果たしてから、いくつかの神秘的な力を発揮するようになった。それは、まだ神通力（じんつうりき）という点で見れば大したものではなかったが、自分自身がラージャ・

ヨーガを成就したということを認識するには、十分であった。

修行を出てすぐは、ほとんど寝ない食べないの状態で仕事をしていたので、特に冴えていました。これは、天耳通になりますが、普通では聞こえるはずのないほど離れている人たちのヒソヒソ話が聞こえてきたりとか、マントラがズーッと聞こえていたりとかしましたね。

また、願望成就の力がすごくついてきました。まず、修行を出てすぐに、富士の総本部道場のシヴァ大神、ヴィシュヌ神の絵をかくために、道具を渋谷に買いに行ったんですよ。成就する前には、わたし、すっごく方向音痴だったんですね。でも、そのときは一発で目的地に着いてしまったりとか、普通は手に入れるのに苦労する、とても大きい額が思いもよらないくらいスンナリと手に入ったり。そういうことがありましたね。

それから、絵をかくための絵の具台が欲しかったんですけれど、近くのマーケッ

トに行ったら、本当に、その絵の具を置くために作られたようなワゴンが見つかったりとか、驚くことばかりでしたね。

また、心の状態としては、ラージャ・ヨーガを成就するまでは、わたしは非常に自と他の区別がはっきりしていて、心も非常に冷たかったんです。あまり苦しみを味わっていなかったから自分のことしか考えられなかったという部分が非常に大きかったと思うんですけれども。そこで三カ月間の修行で、尊師に苦しみを味わわせてもらって、修行から出てきたときというのは、以前よりもはるかに人の痛みがわかるようになってきて、自と他の区別が少しずつなくなってきていたような感じがしました。それが一番ラージャ・ヨーガの成就の素晴らしい点だと思います。

◉本当の修行の始まり

※ラージャ・ヨーガの成就ということで修行を出たが、もともと霊性の高かった

マチク師は、既にクンダリニー・ヨーガのプロセスに入っていた。

「本当の修行はこれからだ！」

ラージャ・ヨーガの成就をしたとき、尊師はこう言われた。その言葉どおり、マチク師の本当の試練は、ここから始まったのだった。

激しいマハー・ムドラーの連続。マハー・ムドラーとは、グルの巧みな導きにより、弟子の心の苦しみを現象化させ、その苦しみを味わわせ、乗り越えさせることによって心の成熟を促すという高度な技法である。

やはりまだ、今生のけがれが若干残っているせいか、マチク師はオウム真理教の支部に配属されたにもかかわらず、全力で救済活動をすることができなかった。それを見た尊師は、マチク師をクンダリニー・ヨーガの修行に入れ、成就者の制度を大きく変更されたのである。

そのころ、ラージャ・ヨーガを成就したら、〝大師〟という称号が与えられて、

支部活動の中心的存在として活動することになっていたんですが、その制度をわたしが原因で廃止したと言われました。「マチクを見ていて無理だと思って、ラージャ・ヨーガで大師とするのはやめたんだ」と言われたんです。それにメチャクチャショックを受けて、一晩泣き明かしました。

カルマが少しも落ちていないと言われたのもショックでした。極厳修行であれだけ苦しんだんだから、生まれてからあんなに苦しんだのは初めてなんだから、もう完全に三悪趣のカルマは切れたなんて傲慢に思っていたんです。でも、そうではないと。

例えば、修行中にさんざん恐怖を味わって、立位礼拝のときもパッと痛みがなくなったりという現象があったので、地獄のカルマは完璧に落ちたと自分で思っていたんですよ。

でも、クンダリニー・ヨーガの修行を始めると、そのときにまた恐怖が出てきたりとかするんですね。アストラルのヴィジョンも、それまでは結構美しいヴィ

ジョンが多かったにかかわらず、クンダリニー・ヨーガの修行に入ったらひどいヴィジョンが出て。死体がごろごろ転がっていたりとか、殺されそうになったりとか、完全に地獄のカルマを象徴するようなヴィジョンがいっぱい出てきていたんですよ。

それに対して、尊師には、「マチクの生き方は、シッチャカメッチャカで、瞑想だけが良かったというのがおかしいんだ。今は色と空が同一なんだから、それが正解なんだ」と言われました。

◉シヴァ大神からの祝福

※カルマというものは、その果報を受け、じっと耐えていれば、必ず落ちるものである。マチク師も、尊師にマハー・ムドラーをかけられ、苦しみを味わうことによって、速やかにカルマを落とすことができた。そして、瞑想状態も、それを境に変わっていったのである。

それまで、悲しみとか恐怖感が多く出てきたんですけれども、それがなくなって、だんだん楽しい世界になってきました。それは、やっぱり尊師にマハー・ムドラーをかけていただいたことによって、わたしの中の苦しみが落ちて、楽が現象化したんだと思います。

山とか木とか空気とかを見ていると、全部自分の友達なんだなあという感じがわいてきました。わたしはひとりぼっちじゃないんだなと。それに対して尊師は、まだそれは妖精の世界だから、今度は自分が師として周りのそういったものを見れるようにならなければいけないとおっしゃったんですけれども。そうやって、それまですごくすさんでいた心が、少しずつチェンジしていったんですね。

そのころに、シヴァ大神が祝福してくれている波動を感じたりすることもできるようになりました。

尊師が、わたしたちの修行を進めるために外で護摩（ごま）を焚（た）いてくださっていたんですけれども、その煙が非常に激しく修行場に入ってきたんですね。そのときわ

たしには、これはシヴァ大神が喜ばれて、祝福してくださっているという波動がはっきりとわかっていたんですよ。そして、すごく気持ちがいいなという感じがあって。ただ、煙がいっぱい入ってくるものですから、周りの人たちが「こんなんじゃ修行ができない」と言って、窓を閉めていったんです。わたしはまずいんじゃないかなと思いましたが、そういうことを言ってもだれも信じてくれないという気持ちがあって言わなかったんです。一箇所だけ、三センチほど戸が閉まらなくて開いてたところから、風がピューピューピュー入ってきました。その風の音を聞いて、わたしは今度シヴァ大神がすごく怒ってるというのがはっきりわかりました。

その後に尊師が入っていらっしゃって、部屋の窓が閉まっている様子を見て、「なんで部屋を閉めているんだ。シヴァ大神が怒っているじゃないか」とおっしゃったんです。そのとき、自分がちゃんと正しい受け取り方をしてたんだなと思いました。

やっぱり高い世界に意識が向いてきたから、シヴァ大神のそういった波動も感じることができたんだと思います。

◉逃した成就

※順調に体験の進んでいたマチク師であったが、殺生のカルマというものは簡単に切ることはできなかった。またも、クンダリニー・ヨーガ成就直前で、今生作ったカルマのけがれによって、成就を逃してしまったのである。

成就がもうすぐだって言われて成就しなかった原因として、まず光の体験がなかったということと、それから、引っかからなくていいようなヴィジョンで引っかかって、尊師にザンゲしなければいけなかったりとかいう経験があったんです。まず、現世のときの非常に遊び好きのデータによって、尊師を裏切ってしまったヴィジョンを見て、暗くなったりしました。

尊師が、わたしのヴィジョンの状態を見て、光のデータが足りないということで、それまでの修行プログラムを変えて、二十四時間のツァンダリーの瞑想修行に移ったんです。その間も尊師からイニシエーションを受けたりしていたんですけれど、それでもまだ成就しないと。

そのころ、アーナンダ師とも一緒に隣で瞑想をしていて、尊師のヒヒイロカネを使ったイニシエーションがありました。アーナンダ師が先にイニシエーションを受けて、そのときに上から光が射し込んでくるという体験をして、成就だと認められたんですね。

わたしもその次に同じイニシエーションをしてもらったんですけれども、その前にとんでもない邪淫（じゃいん）のヴィジョンを見ていたので、尊師にばれたらどうしようと思ってて、それが心の引っかかりになっていたんです。

尊師にイニシエーションしてもらうと、上から光が射し込んできて、アーナンダ師と同じ体験をしていたんですけどね。尊師にそのヴィジョンを透視されてし

まって。イニシエーション中、尊師が突然、「変な男が出てきたぞ。そんな状態じゃ成就は駄目だ！」とおっしゃられて、そこで成就を逃してしまったんですね。

◉鮮やかな瞑想世界

※二十四時間ひたすら瞑想の修行が続く。しかし、この長期間の瞑想修行が最終的には非常にためになったとマチク師は語っている。この間に、瞑想修行はどんどん進み、鮮やかなヴィジョンとして瞑想することができるようになったのである。

ひたすら瞑想しているので、瞑想が映像のようにはっきりと流れてくるんですね。例えば、瞑想の中に梵字(ぼんじ)を観想する場面が出てくるんですが、はっきり形を覚えているわけでもないのに、あれがリアルに色つきでしっかり出てくるんです。そして、その梵字がエネルギーを回すようにぐるぐる回っていくのがはっきり見

えたりしましたね。それも、すごく意識が鮮明な状態でそういったものが見えるわけです。

このころ意識の分化も起こりました。瞑想している自分、雑念に覆われて否定的なことを言っている自分、それを冷静に見ている自分と、この三つに分かれてきたんです。

雑念の自分が「わたしなんかもうだめだ。どうせこんなにカルマも悪いし」と悶々としていると。そうすると、もう一個のそれを冷静に見ている自分というのが「そんなに尊師に帰依できないのは信仰心がないからだ」っていうふうに、自分が自分に示唆するっていうのはおかしいんですけれど、示唆みたいな感じで与えてくれて、それによって心がパッとチェンジしたという経験もありましたね。

その瞑想の中で面白かったのは、究竟（きゅうきょう）の瞑想のときにボッと変化身が頭頂から抜け出して、もう一つの体がスポンと抜けて、突然バルドーの中に入ってすごいスピードで飛んでくんですよ。斜め上にビューンとトンネルの中を飛んでいく

と。そして、突然生まれるんです、他の世界に。

そのときの自分の身体というのがブルーの光の身体なんです。でも、そこで自分の身体というのを保持できなくて、泡のようにバーッと散ってしまって、またもとの世界に戻ってしまうと。何回かチャレンジしたんですけれども、うまくいかなくて、それでも続けているうちに、「この経験をわたしは何十回も何万回も繰り返しているんだな」という記憶が突然蘇ってきたんです。

すると、その次に生まれたら、今度はピンクの光の身体になっていたんです。今度はまん丸の綺麗な球として形ができたんです。そのとき、突然尊師が出ていらして、「今度こそは死ぬなよ」とおっしゃって、わたしのピンクの身体を手に持ってくださって、ずっと上の方に上っていったんですね。そして、膜みたいな壁みたいな所を突っ切って、ずーっと上に行ったら宇宙空間に出たんです。下を見たらものすごく透明な綺麗なブルーの膜が張ってあって、すごい至福感に包まれていたという体験をしました。

それを尊師にお話ししたら、それは深いアストラル世界の経験であって、身体がブルーからピンクに変わったのはステージが上がった証拠だというふうにおっしゃいました。その細かい意味合いについては、今は話をしないと言われて、そのときはあまり詳しいコメントはいただけなかったんですけども。

あとでクンダリニー・ヨーガを成就してから極厳修行者の指導をしているときに、ブルーの空間が神聖天だと尊師から言われていた人がいたので、わたしのその体験も神聖天だったんじゃないかなと思いました。

◉卑屈な〝成就〟

※結局マチク師は、霊的な体験としては十分クンダリニー・ヨーガの成就の条件を満たしていたのだが、精神的なプロセスが追いつかず、なかなか成就することができなかった。尊師は、それを一気に引き上げるために、さらにきついマハー・ムドラーをマチク師に課すことになる。

クンダリニー・ヨーガ成就のとき、尊師は、マチク師に、
「もう、成就でいいよ。」
と、一言投げやりに言われたのである。
クンダリニー・ヨーガの成就は、卑屈な精神状態のままの成就だったと、マチク師は語る。

ラージャ・ヨーガの成就のときは心がすっきりして、軽くなって、ほんとに生まれ変わったようなさわやかな印象が強かったんですけれども、クンダリニー・ヨーガの成就のときは、逆にそこから苦がスタートしたっていう感じだったんですよ。成就とはこんなに苦しいものなのかと思うくらいに、いろんな自分の心のけがれと葛藤していましたね。
一番大きかったのがとにかく自分の中の「寂しい」っていう感情です。これは完全にスヴァディスターナ・チァクラの引っかかりだと思うんですが。とにかく

愛情欲求がどんどん出てくるんです。
思い起こせば、高校生のころ、その寂しいという感情を自分で認識してたんですけれども、その後「遊ぶ」ということを覚えて、その心をかなりごまかしていたんです。その心のけがれを落として、ごまかす要素がなくなった時点でまたそれが表に出てきたんだと思うんですけれど、すごく寂しいと。グルに対する愛情欲求があっても、それは満たされないからよけいに卑屈になって、寂しくなるんです。

◉寂しさの究極へ

※出家修行者の生活は厳しい。細かい生活についても様々な戒律があり、それを守っていかなければならない。ワークは極限でこなさなければならない。心に苦悩を抱えながら、マチク師は必死に心のプロセスを進めようとした。しかし、あまりの苦しさに、それを紛らわそうと、破戒をしてしまったこともあるという。

しかし、破戒をすると、尊師から遠くなってしまう。その悪循環の中でもがいていたのである。

これも、わたしに愛情欲求という煩悩が苦しみであることを知らしめるためのマハー・ムドラーだったと思うんですが、そのころ尊師からもほとんどお話ししてもらえなくなって、たまにお話ししてくださるとかなりきついことを言われました。それで、よけいに卑屈になってしまうという繰り返しでした。

そんな状態が続いていたんですが、四月に急に大阪の方に行くようにと尊師に言われて、大阪支部に行ったわけなんです。このときにも尊師から強烈なマハー・ムドラーをかけられました。でも、それをきっかけに真面目になったんですよ。

意識がそこでチェンジして、それまでの「やりきれないから破戒をして遊ぶ」というのをやめて、それからは、例えば「今日入信をさせたいから、何々を食べたいけれども、これをグルとシヴァ大神に供養します」といって供養してしまう

と。「その代わりに入信を一人させてください」と考えると、どんどん入信があるんですよ。それで、結構そのころ支部活動も順調にいくようになりましたね。こんなマハー・ムドラーもありました。支部に聞きたいことがあって用事があると。そうするとヤソーダラー正大師から最初わたしに電話がかかってくるんです。「尊師からなんですけど、これこれはどうなんですか」というふうに。その間に、尊師が支部のサマナに対して同じことを聞いて電話してきたりとか。

普通は、支部長であるわたしに、尊師から直接お電話がかかってくるというのが本当なんです。そうすると、異常にその後悲しくって悲しくってしょうがなくて。寂しさに胸がつぶれそうになって、信徒さんとの対応もやっとという感じになってしまうんです。

それだけ強い心の働きがあったからでしょうか、このころ面白い現象が起きてきました。わたしの心の働きに合わせて天候が変わるんですよ。もう本当にだめだと思うと、雷がガラガラガラッと鳴ったりとか、しばらく天気がそういった雨

続きになってしまって、で、やっと尊師から何カ月ぶりかに電話がかかってきた次の日には、ほんとにスッカラカーンとすごくいいお天気になったりとか。強い心の働きというのは天候まで変えてしまうんだなという実感がありました。

◉グルはすべてを見ていてくださる

※心が押しつぶされそうになりながら、自己の内面からわき起こる苦しみと必死に闘ったマチク師。「この心の空虚感は、何をしても解決できないのではないか」と考えたほどであったが、努力さえ怠らなければ修行は必ずわたしたちを変えてくれる。マチク師は、真理の法を学ぶことによって心の根本にある寂しさを乗り越えることができた。

わたしの心の奥の寂しさが完全に切れたのは、それから少し経ってからでした。支部活動の合間に修行時間が多く取れるときがあったんですが、そうするとやは

り寂しい寂しいという感情がどどどどどっと出てきて。しかし、教学しているうちに、その感情というのが一回バチッと変わったことがあったんですよね。寂しい寂しいっていう感情は、自分が何かを求めているから出てくるのであって、自分の求めていたものを全部グルに対して供養してしまったらいいんじゃないかと思ったんです。

結局わたしは、かまってもらいたいとか、無視されるのが嫌だとか、認めてもらいたいとかいう気持ちが強いんですよね。無視されるっていうことは、認めてもらえない、自分の存在自体がないということだから、それがまた苦痛に変わってしまうわけで、自分というものをなくして、それをすべて供養してしまえばいいんじゃないかと思って実践したんですよ。そうしたら、今まで苦しかったのが一変して、なくなってしまいました。

グルのほんとの意味での分身になりたい、グルのお使いとして、パイプ役として、信徒さんに接していきたいと。そう思ったら、ほんとに心がチェンジしたん

ですね。ずーっと小さいころから引きずってきた心の寂しさがそこでほんとになくなったんです。それがものすごく大きな変化だったですね。
そうしたら、その少し後に尊師から電話がかかって、あのときこういう感情だっただろう、どういう感情だっただろうって言われまして、やっぱり結局すべて尊師はお見通しなわけなんですね。遠くに離れていらっしゃるんだけども、無視されていると思ってたんだけども、全部お見通しで。グルとの物理的な距離っていうのは全く関係ないんだと、その隔たりを作っているのは自分の心のけがれなんだとわかりました。
結局、わたしは、尊師のマハー・ムドラーの厳しさに、それがわたしに対する慈愛によるものだとわかってはいても、心がそれについていかなくて何度も苦しんだわけですけれども、このとき、やっとグルの愛の深さというものに気づきました。
まあ、これはラージャ・ヨーガの極厳修行のときもそうだったですが、苦しみ



が消えた段階で、グルの偉大さというものがわかるんです。たとえ相手に嫌われようが、憎まれようが、その人の本当の幸せを考えてマハー・ムドラーをかけてくださる——。そのグルの広大無辺な慈愛に、本当に心から感謝しました。

◉縦横無尽の神通力

※今、クンダリニー・ヨーガの成就をして三年あまりの日々が過ぎようとしている。尊師によってもたらされた心の成熟に伴って、マチク師は神通力を発揮するようになった。宿命通(しゅくみょうつう)、天耳通、漏尽通(ろじんつう)……中でも、救済活動に役立つ他心通(たしんつう)がコントロールできるようになったという。

支部活動を通じて、また修行者の監督をしているうちに、他心通が自由に使えるようになりました。最初は、他心通といっても、自分に縁のある人についてしかわからなかったんですが、最近ではこちらが意識を向ければ、だれについても

わかりますね。

また、他の神通力としては、この人のこういう部分が直ったらいいなと思うと、それがポッと自分に移ったりするんですよね。逆に、この人のこのエネルギーを受けたくないなと思うと遮断することができるようになったりとか。そういったコントロールがだんだんできるようになってきました。

例えば、今は東京本部にいるわけですけど、人と話をしていて、この人は嫌悪がひどいから、その感情がなくなればいいなと思うと、相手のイライラがわたしに移ってくるとか。そして、相手が直ってしまったり。相手がものすごく落ち込んでいて、もう自分は駄目なんですと相談してきたときに、かわいそうだなあと思うと、自分がドンとした重いエネルギー状態になってくる。そして、相手からは、ああ直ってきましたと言われたりとか。

一番如実に出たのが、経行頭陀（ずだ）修行をやっていたときなんですけども、相手がどこが悪いというわけではないけれど、歩けない状態になっていたと。そして、

その子と一、二時間話をしていたんですね。そうしたら次の日に、その男の子が「歩けるようになりました。やっぱり自分の思い込みなんですね」って言っていたんですよ。で、よかったねって話をして、いざ自分が歩こうとしたら歩けなくなっていたりとか。ほんとにその子が言っていたのと同じ、足が前に出てこないという状態で歩けなくなるんです。

だから、本当にかわいそうだなと思うと、相手の苦しみを吸収して、逆に遮断しようと思えば遮断できるといったように、コントロールできるようになってきて、そのへんは非常に便利だなと思いますけどね。

もう一つ、人のアストラル世界を操作して、心を変えてしまうということもできるようになりました。絶対、オウム真理教をやめると言っている信徒さんに話をしにいかなければならないときがあったんですね。そこで行く前に瞑想をしたんです。深い瞑想に入っていったら、その人のアストラルに到達したっていう感覚があったんですよ。

そのときに、ここでこの人のアストラルを変えてしまえば、もしかしたらまたやり始めるかもしれないという直感智が働いて、ツンツンと、その信徒さんのアストラル世界をいじったんです。そして、深い意識からこちらの意識に戻って、その後にその人の家に行ったんです。そうしたら、それまで絶対やめる言っていたのが、話をしているうちに信徒を続けていくことになったんです。やっぱり思ったとおりになったなと思いましたね。

◉生まれ変わる道がここにある!

※自己の苦悩と闘い、それを乗り越えて生まれ変わったマチク・ラプドンマ師。修行を始める前の自分を振り返って、こう語っている。

あのころのわたしは、自分の心の奥にある寂しさ、愛情欲求を直視せずに、遊びでごまかしていて、非常に不幸な状態だったと思います。何が不幸かというと、

自分が本当にやりたいことがあっても、心の不安定さから、全力ですることができず、能力を発揮することができなかったんです。そして、心の空虚感をごまかすために、遊んで、ただ単に時間をつぶしているという感じでした。まあ、この空虚感は、何をしても解決できないというあきらめもありましたけど。

でも、修行によって、真理によって、それは乗り越えることができます。確かに、乗り越えるまでは苦しいし、つらいけれど、乗り越えた後の素晴らしさは引き換えにはなりません。皆さん、それぞれ心の苦しみを抱えていらっしゃると思いますが、あきらめないでください。ここには、あなたが生まれ変わる道が存在しているのです。そして、この道は、苦しみを解決するだけではなく、人を超えた力をわたしたちに与えてくれるのです。本当の自分に早く巡り合っていただきたいと思います。

※努力することの素晴らしさ、心を浄化することの素晴らしさ、自分を超えるこ

との素晴らしさ——マチク・ラプドンマ師はそれをかみしめながら、今また、さらに偉大なる修行の道を歩き始めようとしている。

おわりに

「宗教には、二つのタイプがある。一つは思い込みの宗教であり、思い込みの宗教は思い込みの体験をもたらす。わたしたちがこの人間世界に生まれてきていることからもわかるように、もともと迷妄の中に没入しているわけだから、思い込みの体験はよりいっそう思い込みの強い性格形成へと導くことになる。その結果は、下向の世界へとつながり、三悪趣へと至るのである。

反対に、検証的宗教が存在する。これに属する宗教は、サキャ神賢の教えや原始ヨーガに見ることができる。ここではステージを呼吸の停止の状態、あるいは神通力によって測るのである。そして、呼吸停止以降の状態の一つ一つをこと細

かく記載して、その後にくる神通力についても同様に細かく記載することによって、その修行者が正しい道を進んでいるかどうかを検証させるのである。

この検証主義における宗教は、人々の魂を絶対的な境地へといざなうこととなる。なぜならば、既に仏教の開祖サキャ神賢や偉大なるヨーガの成就者たちがその世界のすべてを知り、表わしているからなのである。」

麻原彰晃尊師は、『ザ・サマディ』（オウム出版）において、このように語られたことがあった。まさに、オウム真理教がこの検証的宗教であることを、本書を読み終られた皆さんは、納得なされたのではないだろうか。今回取り上げた四名の体験は、本書では特に説明しなかったものでも、数多く経典と合致しているのである。

尊師に導かれて、これから先も、彼らは速やかに修行ステージを上げていくことだろう。おそらくは、そう遠くないうちに次のマハー・ムドラーを成就し、さらに光輝く姿を見せてくれるに違いない。そして、そのころには、また、新たな

るクンダリニー・ヨーガの成就者が数多く誕生しているだろう。
——その一人は、もしかしたら、あなたかもしれない。

一九九二年二月五日

オウム出版広報編集部




原爆覚醒
精神の炎を目覚めさせよ!

仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

INITIATION

イニシエーション

麻原彰晃著

この名著はすべてを語っていた！

「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、
最高の修行法を伝授する。
本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀——
ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、
誕生した三五〇名の解脱者が証明する。
さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、
農作物輸入自由化など、
今日の世界と日本の動向を正確に予言している、
驚くべき記述の数々！

武田 健さん（東京都／学生）
「末法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県／警備員）
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本 勇さん（石川県／会社員）
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山口県／店員）
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

武田葉子さん（熊本県／主婦）
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都／経理事務）
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。



◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。
◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウムの秘儀を比較する。
◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。
◎総勢三十一名の体験談／「クンダリニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。

定価2163円 ご注文は書店にてお願いいたします。直接幣社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)
オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANASUTRA

麻原彰晃 著

解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!



解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 (本 社) 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325
(営業部) 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598

絶対幸福の鍵を解く

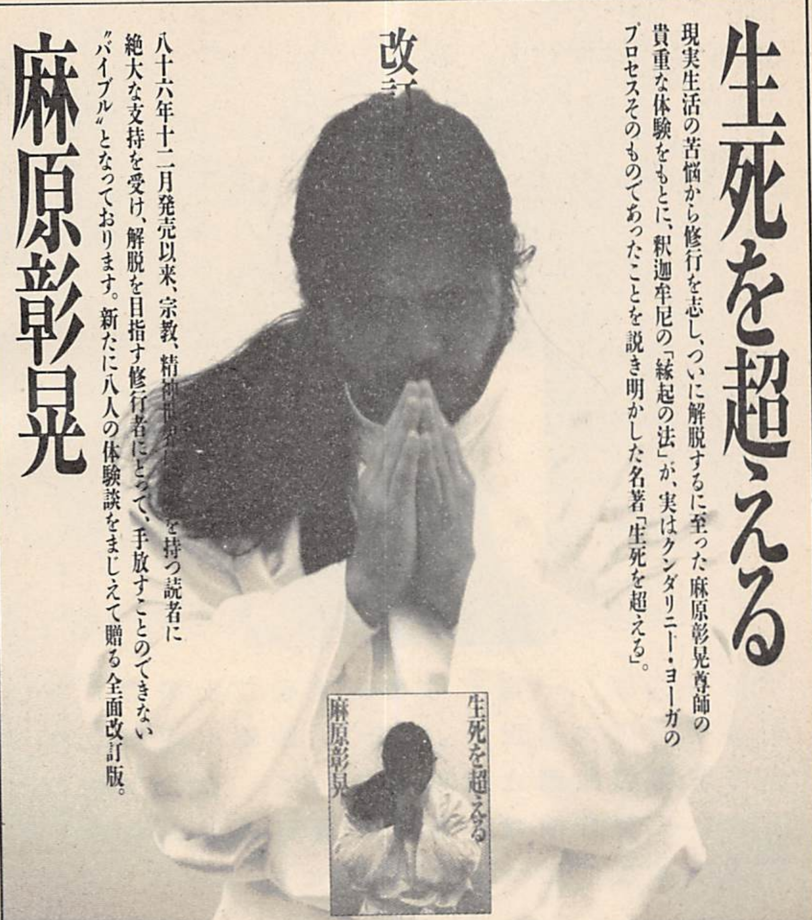
生死を超える

現実生活の苦悩から修行を志し、ついに解脱するに至った麻原彰晃尊師の貴重な体験をもとに、釈迦牟尼の「縁起の法」が、実はクンダリニー・ヨーガのプロセスそのものであったことを説き明かした名著「生死を超える」。

改訂

八十六年十二月発売以来、宗教、精神世界に関心を持つ読者に絶大な支持を受け、解脱を目指す修行者にとって、手放すことのできない〝バイブル〟となっております。新たに八人の体験談をまじえて贈る全面改訂版。

麻原彰晃



◎誰にも書けなかった知られざる世界が今ここに！
◎真実を求めるあなた、人生の悩み、苦しみを乗り越えたいあなたに贈るヨーガ、仏教の真髄！
◎修行者二十一人の豊富な体験談も満載！

麻原彰晃著／B6判／定価1854円（本体1800円）

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料300円）

●オウム出版　●〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17　電話：03（3439）6043／郵便振替：東京2-109325

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

えんじょい・はぴねす

Enjoy Happiness

月刊『えんじょい・はぴねす』



——主な内容——

◆ Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて——えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆ Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆ JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
——釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆ Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆ あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝ＥＨ会員〟になることができます。ＥＨ会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。
お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。

◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！

◉成就者との対面および電話による悩み相談。

◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（ＥＨ会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとＥＨ会員となります。
なお、定期購読の申込みは６カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。



最高の智慧、神をも超えた力……
最終解脱者があなたを変える！

オウム真理教

その修行ステージの高さゆえ、
〝イェシェ——完全なる絶対なる神の叡智〟
とチベット仏教の高僧より称えられる
麻原彰晃尊師。
最高の智慧と神通力を有した
日本でただ一人の最終解脱者です。
その麻原尊師が、
あなたに贈る幸福へのプログラム。
病から解放されたい……
最高の幸福を得たい……
解脱と悟りを得、神通力を
ほしいままにしたい……
こんなあなたの願いを、
麻原尊師が仏教・ヨーガ・密教の
あらゆる秘儀を駆使して、
速やかにそして確実にかなえます。



※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

神通力者への道
資料請求券

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『神通力者への道』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『神通力者への道』読者係」

◆各本支部のご案内◆

富士山総本部 0544(54)1267
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部 03(3327)8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
大阪支部 06(397)1022
〒532 大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部 092(474)2877
〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部 052(252)0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部 011(241)4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部 075(371)3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部 022(268)3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部 0762(51)8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部 0888(84)8286
〒780 高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部 082(264)6250
〒732 広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部 045(243)8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部 0734(24)2859
〒640 和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部 0292(26)8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部 0474(66)4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所 0485(74)6205
〒366 埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所 03 (3476) 5065
〒150 東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉

ニューヨーク支部 212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部 (0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

神通力者への道

一九九二年三月十三日　初版発行

定　価　六〇〇円

編　集　オウム出版広報編集部

発行者　松本知子
　　　　石井久子

発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二－八－一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二－一〇九三二五

ISBN4－87142－025－6　C0014　P600E

神通力者への道

麻原尊師の愛弟子、
四名の体験

ISBN4-87142-025-6 C0014 P600E 定価600円（本体583円）